

第 3 ・ 4 次調査

第3次調査

昭49. 3. 16～3. 29

この調査は、国庫補助が得られなかったため、経費村単負担で実施された。実働9日で、次に予定される本調査（第4次と呼称）の予備調査としての目的で、結局、住居址1軒・土壙1基を完掘したが、調査の内容は公刊されていない。ここには2つの遺構の写真を掲げるにとめる。

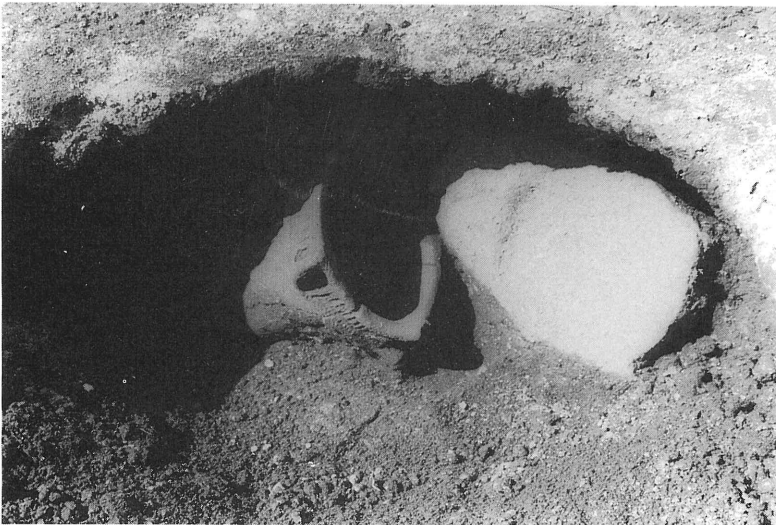
▼調査区遠景 白くテントが見える地点



▼調査風景 北側から



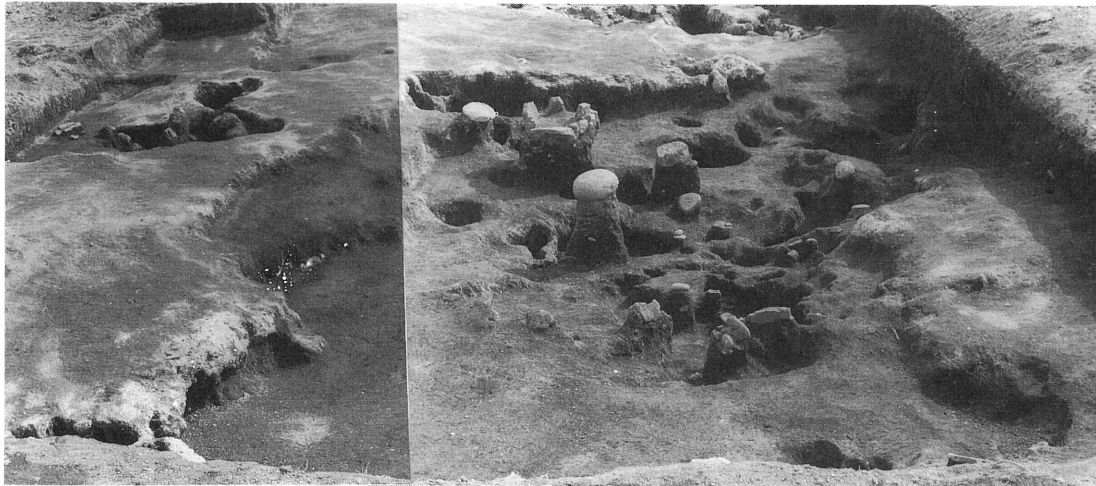
▼袋状土壙の検出状況



第4次調査分の21基にプラスした扱いで、この土壙はP.22と呼称された。開口部の出土状況で、左手の土器個体は阿玉台式末葉の土器。ローム上面の七本桜・今市軽石層で開口部が確認されるが、崩落しやすい土層であるため、プランは原形よりかなり変形している。

3次・住居址

▼住居址の全景 中央上辺に石囲炉がローム面から浮いた状態で存在。重複した住居址か。

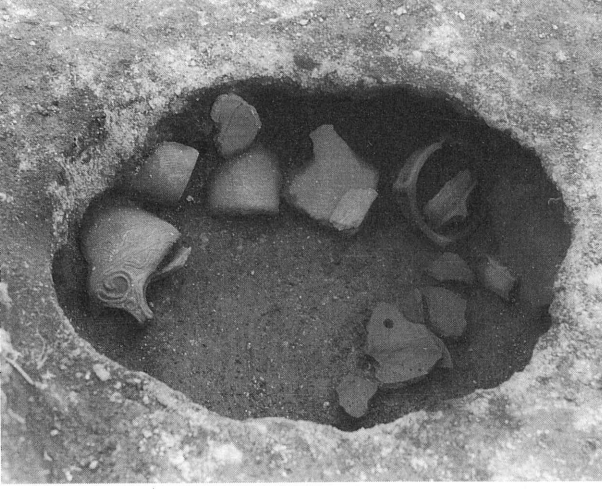


▼住居址近景 中央手前に偏平な礫を立てた石囲炉。黒土中に存在したことがわかる。



3次・袋状土坑

▼▼袋状土坑の全景 2個体の土器を含む遺物が壁ぎわに寄りついている。投棄を示す。



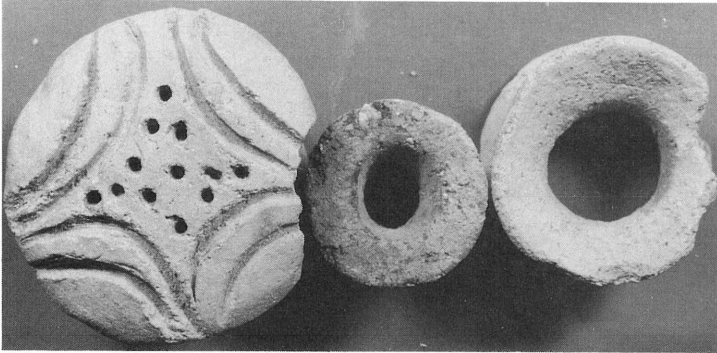
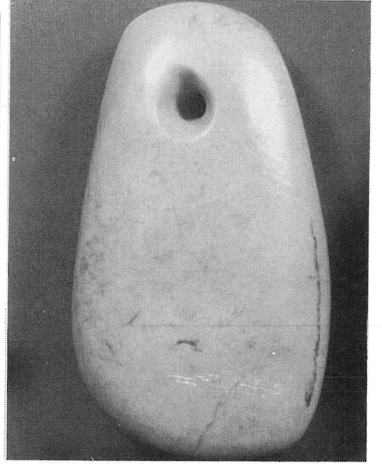
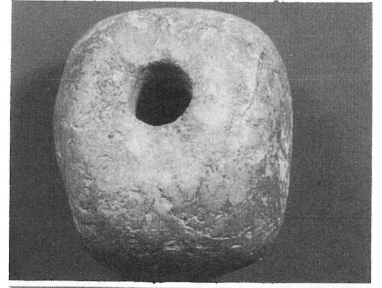
▶ 阿玉台末葉に伴出する土器（坑内出土）



第4次調査

昭49. 7. 29～8. 25

国庫補助をうけて実施。A, B, C区に分けて発掘，袋状土壇21基・中世大溝一条を検出した。袋状土壇の埋没土の観察により子ピットの共存を実証，土壇伴出の遺物から土器の同時性の判断などの成果を得た。



- ▲耳栓 左端=P.10の開口面出土，中央=A-2区表土
- ▶硬玉大珠 上=2次・P.24出土，下=4次A-2区表土
- ▼4次・調査風景 奥手は西で，高館山などの山なみ

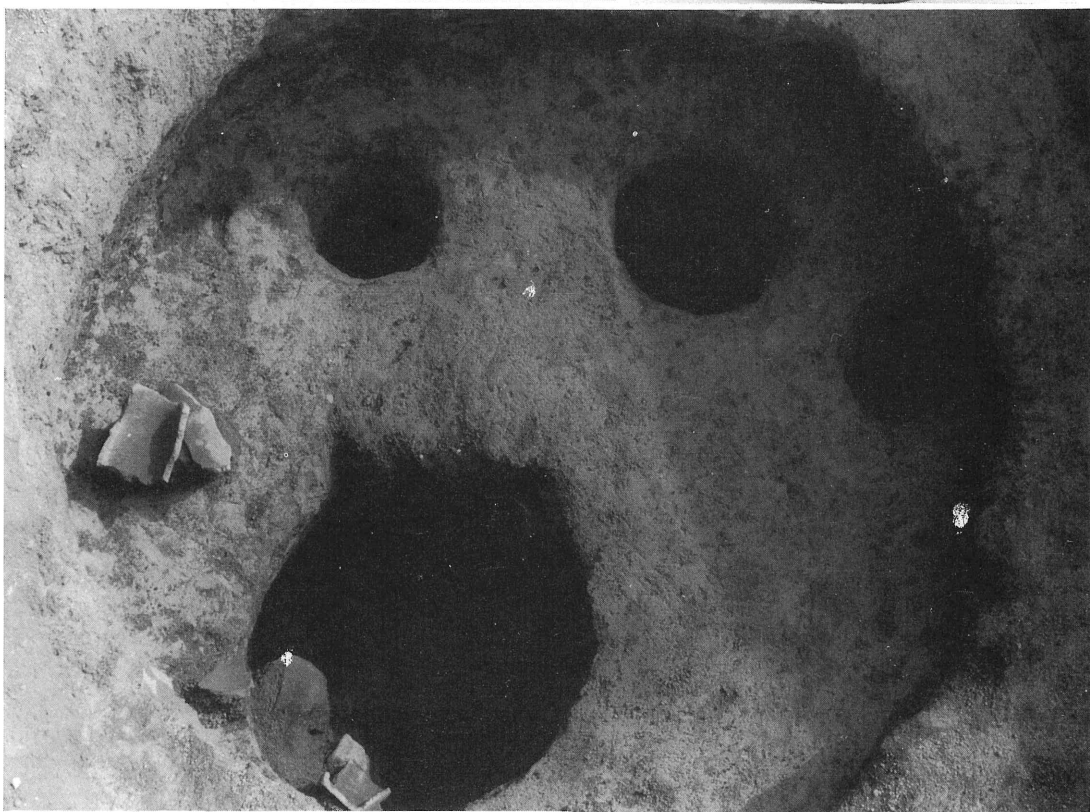


4次・P.1

袋状の原形が墳体下半に良存していた。子ピット3個をもつ。墳部に浮きで土器片が見え、子ピットの肩口もある。“親・子”が同時埋没したことを示す。

▶墳内の中位から出土した個体（加曾利EⅠ式）

▼断ち割りした埋土断面
袋状の原形をよく残す。下位埋土にローム塊





4次・P.10

◀▼個体の出土状態。埋没途上の投棄を示す



▼4次・P.14 墳底壁ぎわに寄りついていた個体



4次・P.8

▼▼城底の礫群，投棄によるもの。白の矢印は土器片で，右の写真下の個体





▼ 壙底の遺構。中央の長大な礫は中位、壙底壁ぎわの土器は若干の浮き。ふみこわしで斜めに埋土が入り、その斜面に投棄

◀ 壙底壁ぎわ型の個体。投棄により寄りついていたもの。





▲ 4次・P.2 埋没土の断り割り，右手から埋土が左手の子ピットに雪崩こんでいる。
▼ 土器個体の密集出土，土壌の墳底と見られるが，プラン確認できず。





▲▼4次・A区 土坑の群存する状況



10表 第4次調査検出の袋状土壌概要表（抄出）

ピット名	小ピット数	ピット旧名	時期的位置	完掘した時点のピットの サイズ（約 cm）		
				現口径	深 さ	床面の直径
P-1	3	A- の大ピット	加曽利E I	150	80	220
2	子, 孫	A-4 P-2	加曽利E I	不 明	不 明	250
3	2	A-1 P-1	加曽利E I	135	20	150
4		A-1 P-4	不 明	110	35	120
5	1	A-1 P-2	不 明	130	60	155
6	2	A-5 P-1	加曽利E I ?	120	70	180
7	1	A-2 P-2	加曽利E I	100	110	140
8		A-6 P-2	加曽利E I	170	上 100 下 125	上 170 下 190
9	3	A-3 P-1	加曽利E I	100	130	220
10	1	A-3 P-3	加曽利E I	130	120	170
11	1	A-3 P-2	加曽利E I ?	175	50	130
12	1	A-6 P-1	加曽利E I	100	90	150
13		A-2 P-6(新)	不 明	115	65	140
14	2	A-2 P-3	加曽利E I	105	80	195
15	1	A-2 P-6(旧)	不 明	?	35	?
16		A-1 P-5	阿玉台新式	不 明	90以上	180
17		C 区 P-2	加曽利E I	110	110	210
18	1	C 区 P-1	加曽利E I	175	160	250
19	1	C 区 P-3	加曽利E I	150	140	170
20		C 区 P-4	不 明	130	30	120
21	1	D 区 P-1	不 明	90	75	130



写真13 梨木平遺跡各期の土器

I期 1 = 2次P.13 2 = 1次P.37 3 = 3次P.22

II期 4・5 = 4次2号ブロック

6 = 4次1号ブロック

III期 7 = 2次P.17 8 = 2次P.23 9 = 1次

IV期 11 = 2次炉体 12 = 1次P.42

V期 10 1次P.27



4次調査・発掘区俯瞰。上方が南で道路は国道293号。右下の穴が検出した土壌群

Ⅲ 発掘調査の総括

1. 袋状土壌の役割

1～4次の発掘調査の役割で検出された土壌の総数は108基、内訳は1次=42基、2次=41基、3次=1基、4次=24基である。これらの土壌は「袋状」を呈するもの、円筒状のもの、崩壊が著しく僅に壙底に円形の形骸を止めるものなど、大小浅深の規模差も含め多様であったが発掘の結果、「袋状」ないしそれに近い形態をとっていたものと判断された。その在り方は、各調査区にあって（3・4次は隣接）密集・重複しており、2次調査区の炉址3カ所を除いて住居址の存在を認めなかった。既に実施された県域の中期集落跡調査において、このような土壌の集中現象は、矢板市坊山遺跡を嚆矢として芳賀町弁天池遺跡・金井台遺跡、市貝町添野遺跡、その他でも確認されていたが、一見異様とも感じられる土壌の密集が何に起因するものか、偶々か作為か住居址を伴わない状況、壙内から土器石器を出土する状況等の総合的な検討は行われておらず、黒羽町鉢木遺跡の研究成果をふまえた田代寛の「貯蔵穴」説を除いて、土壌の機能についての考古学的論考はほとんど行われていなかった感がある。

壙内から土器・石器など破損品はじめ、炭化物、焼土等の出土遺物についても解釈が定まっていなかった。大量個体の出土は「土器の埋納」を思わせ、その関連で墓壙機能を想定する見方もあり、壙内遺物を〈一括遺物〉として扱ったので遺物の時間差を見きわめ不能にした例も少なくない。それは、狭い壙内での掘削作業によるため遺物の出土位置や出土状態の確認が困難であったことにもよるが、土壌を埋積している充填土の層序関係が不完全にしか把握されなかったことが原因であった。

第4次調査では、これらの問題に対処するため数基の土壌について開口面から縦半分に切断し、掘り込まれたローム層共々、片側部分をスライスしながら剝取する方式を採った。調査事前に、調査担当の常川秀夫が文化庁記念物課小林達雄調査官（昭50年当時）の教示を得て試行したものである。この方式は、土壌の原形を損うことにはなるが埋積土の時間差、遺物の区別、土壌の切断面と土壌観察などに効果があり土壌機能を検討する上に新たなデータを提供することになった。土壌本体は空洞で放置され漸移的に埋没すること、その形状は壁体崩落や踏みこわしなどにより必ずしも原形を遺存していないこと、壙底に存在する付属壙（当該調査では「子ピット」と称した）は土壌本体と同様に空洞で廃絶されたこと、遺物は埋納ではなく投棄によること、出土状態により土器の共伴関係を把握し得ること、開口面や壙底に存在する礫群は〈敷設〉ではないこと、

などが明らかにされたのであった。

以下に、これらの所見が導かれた発掘事実を述べ、貯蔵穴である袋状土壌が群在することの考古学上の意義について考察してみたい。

(1) 袋状土壌の埋積土

土壌の開口面は黒色土を剥取したローム層上面で確認される。梨木平遺跡では、黒色土の下に田原ロームがある。ここでの田原ロームは、上から黄色の七本桜軽石層の薄層、40～50cmの赤色の今市軽石層、褐色で細目の火山灰層の順。そのうち、火山灰層中に小川スコリアの薄層が存在するが、その深さはローム上面から80cmほど下位に当たる。七本桜・今市軽石層は男体山の新しい時期の噴出物で、上河内村は日光からさほど遠くないせいかな今市軽石層が厚めである。土壌は、このローム層中に掘り込まれているが、粒状でポロポロと崩れやすい今市軽石層が壁体をなし、火山灰層に壙底をもつものが多い。大型で深度の深いものは小川スコリア層を掘り抜いている場合もある。梨木平遺跡における土壌の大部分は、この崩れやすい今市軽石層を壁体としているので、空洞状態で外気に曝される期間が長いと壊れてしまうであろう。土壌の大きさの関係でこの層中に構築せざるを得なかったけれど、比較的短い期間で土壌は廃絶されつくり替えが行われたことなどがその難点を補ったものと考ええる。

土壌は、廃絶時の形状で埋戻されれば原形に近い形状を保つし、空洞で放棄されれば外周部からの流れ込みや壁面崩落及び投棄などにより原形は変化することになる。だから、土壌の充填土の在り方は土壌の形状を復元する基本的な手がかりといえる。

51図は、第4次調査P.1の全体と切断面を示したもので土壌埋没の進行を示す一例。この土壌の形状・規模は、開口部が崩れて広く壁が緩傾斜し壙底が平坦な「袋状」で、開口部径約150cm・深さ80cm・底径220cm（壙底全周680cm）。壙底壁ぎわには、大小4個の子ピットが存在し、最大の子ピットは口径85cm・深さ75cmで「袋状」を呈する。当遺跡では大きい部類。充填土は7層に分かれ、埋積の早い順に括って、A=7層、B=5・6層、C=4層、D=2・3層、E=1層となる。

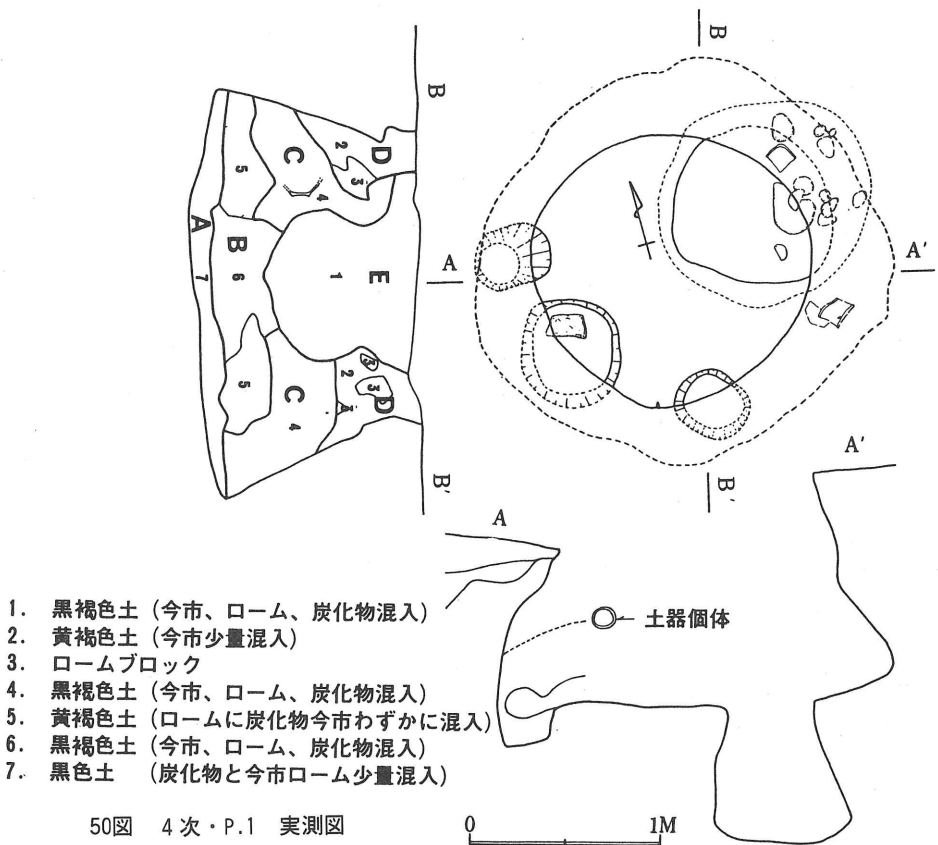
Aは第1次埋没土で厚さ10cm前後、7層の上面に土器破片・石皿破片が出土した。写真68はその出土状態。これらの遺物は壙底から5～10cm浮いた状態にあり、土壌が空洞状態で廃絶された後に黒色土が落ち込んで壙底を被覆し、その次に破損品等の投棄が行われたことを示す。

B、C、Dは第2次埋没土。埋没は連続的に進行し、土壌は中央部が鉢状にくぼんだ形状になる。Bの5・6層には遺物を含み、Cの4層は土壌中位の壁面をとりまく褐色ローム（田原ロームの火山灰層）の塊土を含む充填土。Dの2・3層は開口部直下の充填土で多量の褐色ロームの塊土を含む。このローム塊土の混入は、開口部からの土（掘り上げた土）の流入に加え、土壌上

半部の壁面剝落によるものと解釈され、当報告書では「この時点では、ピットは開口部・壁上半部が原形をとどめぬほどの崩壊・剝落をくり返し」と記述している。

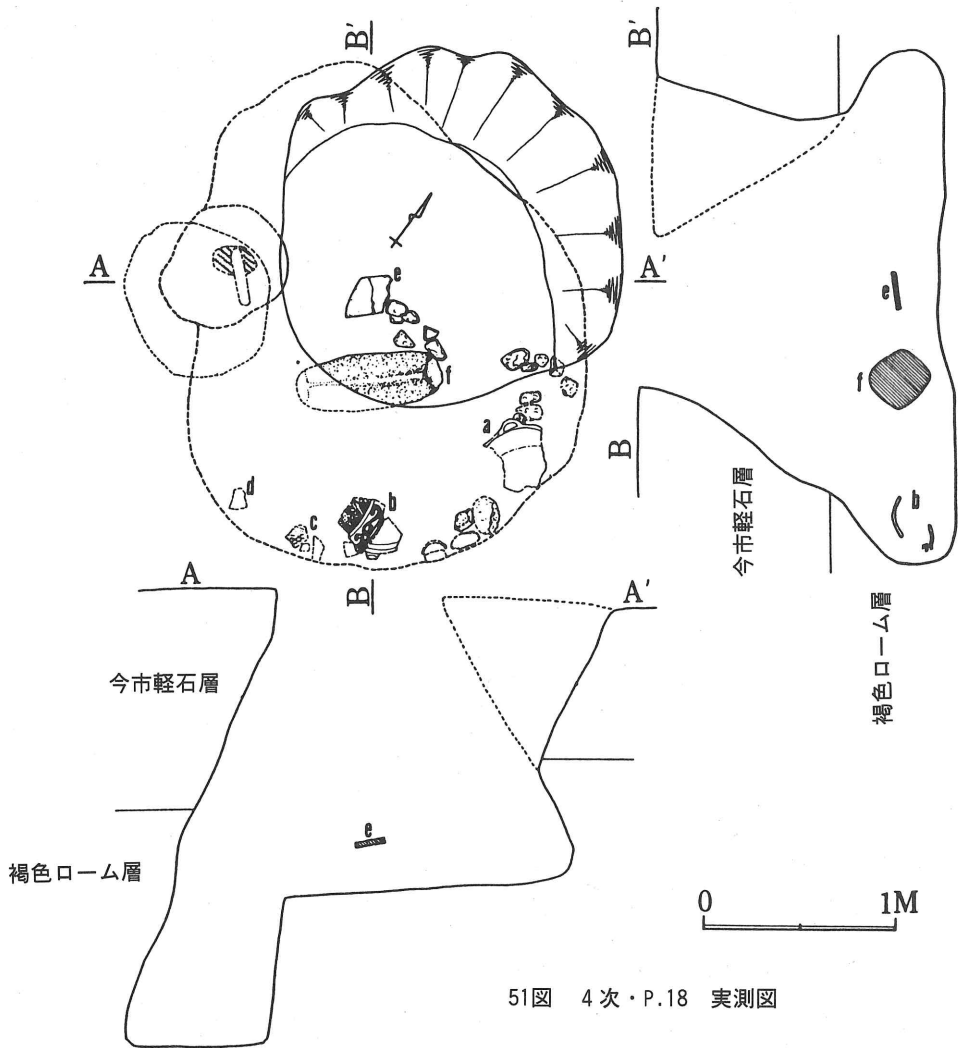
Eの1層は、多量の今市軽石粒を含む黒色土で緊質。下位から土器片・クルミ破片などが混然と出土した。この層は、鉢状になったくぼみを充填したもので、「溜る」状態で自然堆積したものと見られる。遺物もその過程での移動によって埋積されたのであろう。この開口部の充填層が固くしまった土質になるのは、本例を問わず他の多くの土壙発掘においても観察されるところである。その原因は、この層が長時間を経て形成されるため、溜った水と土層中の空気が置換される作用がくり返されるからであろう。

土壙の充填土の、このような在り方は「空洞状態」の土壙が徐々に埋積していったことを示している。即ち、土壙は内容物を取り出した時点で廃絶されたのであり、それまでは土が入り込まない状態で内容物が貯蔵されたという間接的な証左となろう。土壙を埋積する土は、上部からの流れ込みや壁体崩落に伴うものよりも実際には埋め戻しや踏みこわしに起因するものが多かったのかも知れない。後述する埋没実験では、約10か月間にわたり空洞状態で放置した大、中、小の3基のうち、体積の3分の1ほどを埋積した小を除いて埋没はきわめて緩慢であり、壙底を覆う



第1次埋没土は放置しただけでは少量しか堆積しないことが分った。その意味で、4次調査の報告に述べた埋積土の在り方から土壌廃絶の季節を推定する私見には疑念が多い。

52図は、第4次調査P.18の完掘図。土壌の北側上半の壁体が大きく崩れ、壁体をなす今市軽石層の土が壙底へ舌状に流れ込んでいた。土壌廃絶後に故意に踏みこわしたもので、この土壌も空洞状態で廃絶されたことを示している。図に見られる土器破片や礫などは、この踏みこわしの後に投棄されたもので、比較的小さいa, b, c, dなどの遺物は舌状の斜面を滑り落ちて壙底壁ぎわで止っており、長大な石fは斜面の途中で止まり壙底から浮いた状態にある。この土壌は、深さ160cm・壙底直径250cmもある大型で、壙底西側壁には深さ65cmの大人一人がしゃがんで入れるほどの子ピットがついている。この子ピットにも“親”と同様に雪崩込んだ今市層が斜に入り込んでおり、“親”と“子”とが共に空洞状態で廃絶され埋没したことを示している。狭い壙内で



51図 4次・P.18 実測図

子ピットを発掘するのは不便な作業で、特に排土に手間がかかる。実際に土壌掘削の場合は更に面倒な作業であったろう。土壌の入口を開放した状態でも墳底の気温は変化しにくい。入口を密閉すれば更に墳底は常温を保持するであろうし、“親”より深い子ピットはその傾向がもっと強まるであろう。こうした状況から、子ピットの存在は、単に土壌の貯蔵容積を増すだけでなく、恒常的な気温が保存される条件に叶うより貴重な貯蔵物を納めたことが予測される。子ピットの機能は、“特別室”乃至は“親”の貯蔵機能の補助、“親子”コンビの貯蔵機能などが考えられ、土壌機能の多様化を示唆するものといえよう。

土壌の埋積土中には、土器、石器の破片の他に炭化物や焼土が混入していることがあり、西那須野町槻沢遺跡17H-P.3（17号住居址と重複した袋状土壌3号）の例では獣骨破片を含む焼土が検出されたことなどから、埋没途上で炉の燃えかすや小枝・草（茅、葦の類？）、食物の残滓などの不用物の投棄も行われたことが分かる。土壌の空洞放置は日常の起居に危険である。廃絶された土壌は埋め戻しておく必要があり、その途上で所謂ゴミ穴化する経過が存するわけである。それにしても、土壌地区が捨場としての機能をも果す事実は奇異の感が強い。

土壌が空洞廃絶されることは、内容物の一括取出しを示し、内容物は墳内に土と混入しない状態で貯蔵されるもの（堅果類）が適応する。土壌は蓋で密閉されて使用され、貯蔵物の一括取出し後もその土壌を再使用する場合は、蓋で覆って外気を遮断し流れ込む水や土を防いで墳内を清潔に保つ必要がある。高根沢町上の原遺跡の墳内から出土した板状の炭化物で、蓋である可能性をもつ遺物の例もある。蓋は、土壌を密閉すれば事足りるので、このような板状の物質でも、編物や小枝・草の類でも間に合うかも知れない。大田原市湯坂遺跡T₁-V区P.（第1トレンチ5区の土壌）の埋積土には、炭化物を含むローム混土があり、その塊土を割ってみると葦などの茎を思わせる小穴が点々と見られ投棄された不用品の中に開口部を覆った草の類が存在したことを感じさせる。墳内や開口部付近などにしばしば検出される礫群も、蓋に関係する遺物ではないかと考えられる。

袋状土壌が廃絶されるのは、貯蔵穴としての機能が失われるからである。継年使用による壁体とくに開口部付近の損傷、外圧に弱い上狭下広の形状に起因する壁体崩落、雑菌繁殖に伴う保存状態の悪化、その他の耐用期間の経過などが廃絶の要因となろう。その期間が何か年くらいになるのか、目下それを証するデータを持たないが、堅果類貯蔵のサイクルに係ることであるので、精々数年程度のもものではなからうか。秋季の収穫、蓋で密閉しての暫時の空洞期間、次の収穫期までの間での一括取出し、新たな秋季の収穫、とする繰り返し使用によって土壌本体の損傷や雑菌汚染がどれ位の期間をかけて進行するか、である。土壌掘削はかなりの労力を要するが、その構築場所は集落空間において限定された地区と見られるので無制限な更新はできにくいであろうし、生業スケジュールにおいて堅果類採取の秋季は恐らく一年中で最も過重な労作業に忙殺さ

れる時期なので殊更にぜいたくな更新は慎むであろう。この意味で必要最小限の更新にとどめられるものとする。

(2) 堅果採取と土壌腐絶の実験から

〈木の実拾い〉

1日1人当たりどれ位の木の実を採取できるか、実験により試算してみた。採取の実験は、宇都宮市鎗山にある雑木林でクヌギとナラが混生する60×80mほどの疎林で、強風に枯れ葉が舞う初冬のひととき(昭59. 11. 26)。採取量は、30分間に6人で5,845g。1人平均974gを、1日6時間の労働として1人当たりの採取量は11,688gでおよそ12kg弱。クヌギ・ナラの1g当たりの容積を1.65cm³とし、いま、梨木平4次P. 1=現口径150・深さ80・底径220cmの円錐台の体積2,610,989cm³をg当たり1.65cm³の木の実で満杯にする場合、約1,582kgを要する。仮に、1日1人当たり12kgの採取でこれを満杯にする場合は132日弱が必要で、当時のムラを総勢20~30人と見て総出の30人が4日と半日ほどの労作業になる試算である。作業の慣れと採取地の条件がかなり良くても、上述の例の如き大きい土壌を満杯にするにはムラ総がかりで一兩日を要したことが推測される。木の実はいさく1粒ずつ拾い上げるには手間がかかる上に、虫喰いの入った古い実や地面に根を出したものもあり、雑草や枯葉に覆われた地面で食用に足る木の実をセレクトするのは想像以上に面倒な作業であることも分った。木の実はいさくによって完熟して落下する時期が異なり、一斉にではなく何日かにわたって順々に落ちる。また、樹種により生育場所も異なるからムラからの距離も遠近差がある。木の実を常食とする場合、仮に30人の年間必要量は膨大なものになる筈で、収穫の秋は熟生する堅果類を追って土壌を次々に満すためムラ総出の過密スケジュールが連続したであろう。このように、堅果の採取は、同種についても何日かの連続作業が必要である。地上にこぼれ落ちる種実は、当然ながら成熟した順に落ちるわけで一本の樹木についてだけなら毎日少量ずつ採取せざるを得ないからである。採取により各堅果が集積されてもそのまま貯蔵はできない。虫喰いや芽出した不良品を除去する選果作業や種実別の乾燥、土壌内にバラ積みしないための容器詰めなどの作業も付随するであろう。

ムラの必要量を確保し、効率よい採取を行うためには、生業テリトリーを画定すると共にドングリ・クリ・クルミ・トチなど“成り木”の維持管理が必要である。病害駆除や枝払い、下草刈りや枯葉・古い実の取り片づけなど採取シーズンの事前の管理作業が考えられる。

各種の生り木が、それぞれに純林をなしていれば採取に好都合だが、混生している場合は、周囲の雑木の刈払いや植樹などを行い、集落のテリトリー内に“採取林”を確保する努力も必要だったと思われる。生り物が天候に左右される以上、年による豊作、不作が繰り返えられることは必然であり、不作をも予測して常食としての堅果類を備貯するとすれば、その大量確保のため

に“生り木管理”はいっそう重視されていたのではなかろうか。

秋は、堅果類の他の果実などの生りものも多いし、キノコ・山芋・ユリ根など山菜、更にはサケ・マスの遡上などもある。採取・選果乾燥・備貯の一連の労作業をタテ糸に、その他のこれら小作業がヨコ糸として組みこまれるハードで過密な生業スケジュールが存在したものと思われる。縄文中期の温和な気候が存続していた間、常食を堅果類に頼ることは必然といえ、その採取条件から見て共同作業とその共同管理は必然であった。堅果類依存は食糧管理社会の招来をひとつの帰結とし、その証左として群在性土壌をもたらしたのである。

〈土壌の埋没過程〉

空洞状態で廃絶された土壌は、外周部からの流れ込みと壁体崩落を繰り返しながら漸移埋没していく——とするのが、梨木平4次調査における所見であった。中には、踏みこわしや埋め戻しなども行われるが、土壌は空洞で自然埋没する、と考えていた。それを同じ遺跡の片隅で実験したものが次の記録である。

1年未満の観察なので必ずしも十分に信頼できるデータとはいえないが、大方の傾向を示すといえよう。実験の結論は予測を大幅に裏切った。10カ月間で、大、中、小の土壌とも埋りきらず、埋積土は流れ込みと壁体崩落との両者が実際の発掘状況が示すほど混り合うことはなかったし、“漸移埋没”により土壌が埋りきるまでの時間は数カ月ではなく、数年を要することも分った。同じ場所で連続的に更新され掘削される土壌が空洞放置のままでは危険でもある。埋りきるまでは待てまいから、踏みこわしや埋め戻しの事後処理をすることになろう、する見方へ変わったのであった。実験の経過を略記する。

昭51. 1. 18 梨木平遺跡の一角に大、中、小の土壌を掘る。開口部から円筒部を経て、内部が円錐台の形状に仕上げる。男5人でスコップ使用、10:30開始、小は11:10、中は11:50(子ピット1個を追加、12:15)、大は12:50(子ピット2個を追加、13:15)に完成。規模、状況等は11表の通り。図らずも口径が80cmとなったのは、この程度の大きさがないと中へ入って掘り広

11表 梨木平遺跡：実験用土壌の概要

数値単位：cm

	開口部径	深さ	底 径	摘 要
大	80	140	170 (子ピット2)	袋状の上半部は今市層の下部。従って壁体の下部は火山灰層。子ピット(北東、南西各1)の底はスコリア層中。
中	80	120	150 (子ピット1)	壙底がちょうど火山灰層の上面、壁体は今市層。子ピットは東側隅に1つ。
小	80	90	120	黒土の厚さ40cmがそのまま円筒部になる。袋状の本体がそのまま今市層中に存在。子ピットはなし。

げる作業ができない。以降、空洞のまま放置し日曜ごとに状況を観察。

1/25 寒さ連日、今市層までの壁体は凍結しているが、大・中の下部（火山灰層）は凍結なし。風は内部へはほとんど吹きこまない。

2/1, 2/7, 2/8 南向きの壁体上部が凍結と解凍を繰り返えし、きわめて緩慢に少量ずつ今市層土が剝落して壙底にドーナツ状の輪ができる。崩落するのは肩部（円筒部から円錐台部へ移る変曲点のあたり）が顕著だが、粉末状の僅少量。厳冬期の廃絶は、床面を黒土が覆う崩落は起らないし、壙底は凍結しないので投棄遺物が「床面ウキ」の状態にもならない。

2/15, 2/22, 2/29 肩部の崩落が進み、崩落土は月のクレーター様に成長。肩部から壁体上半が丸やかなドーム状に変形。円筒部の剝落も進行し外反してくる。小はクレーター内に黒土が入りこみ、開口部の形状のままに壙底に円盤状の埋積状況となる。中・大は開口部直下を除き、壙底外周には埋積なし。子ピットに埋積が進み、大の西南子ピットは全体の1/4ほど埋没。北東子ピットは埋没せず。この期間、降雨があっても大崩落起らず。

3/7, 3/14, 3/20 早春、降霜寒風あっても温暖化。吹き込みで壙内に枯葉・枯草が入り込んでいくが少量。発掘時に埋積土に見られる炭化物の要因になるほどの量ではない。小は、上位壁面の崩落が著しく、下位壁体（全体の1/3）が原形の状態で埋積。大・中は円筒部の外反化が進み、開口部の黒土が崩落しはじめクレーターが円盤状に変化。大・中・小とも陽のあたる東側から北側の壁が崩れるが、壁体崩落による埋没はきわめて緩慢。

4/4, 4/11, 4/18 春まっ盛り。雑木林が浅く色づき菜の花、雲雀、田うない。春と共に凍結がなくなると壁体崩落は止まり、開口部の崩落が進行。小は上から手が届くほどに埋没（深さ75cm）、大雨で黒土が流れ込み壙底中央の円錐状のくぼみに溜る。大・中の埋積土はクレーターから円錐台様に変形、4/17の大雨で開口部から黒土の流れ込み、雨水は多かったが土量は僅少。開口部に草の芽。

4/25, 5/16, 5/23 初夏。すっかり新緑、壙内に蛙が2匹。

壁面は水濡れで固くひきしまり、大量の雨水でも崩落しない。小は、埋積土の表面が糊を貼った様に固った後、ヒビ割れする。うす緑のコケも生え久しく土の供給がないことを示す。大・中も崩落を全く停止。壁面は雨水の流れ込みで汚れてきたが剝落はない。開口部に生えた雑草が育ってきた。

5/23, 6/5, 6/13 6/3は梅雨入り、その干ぬ間、蟬、小鳥なき陸稻のびる。壙底に今市層土が散り敷いたように堆積。剝落ではなく雨による流れ込み。壁面崩落は全く停止し、強い雨でも変化しない。大・中の埋積土はせいぜい厚さ10cm。開口部周辺に雑草が茂る。大の西南子ピットは底面外壁寄りに沈澱層。壙底中央部分から流れ込んだ水が埋積土の斜面を伝って子ピット底面の空間に溜ったため。開口部にコケが広がる。

6/27, 7/24 暑い。7/22で梅雨明け、麦刈り済み、陸稲が20~30cmのびる。土壌は開口部を雑草が覆い、根を張ったので壁体は安定し相変らず崩落は起っていない。小・中は壙底にも雑草がはびこり、まるで豆ガエルの巢。大・中の東壁ぎわ子ピットはほとんど埋没なく、その壁面を緑のコケが覆っている。水の供給が繰り返されて埋積土は固くしまる。

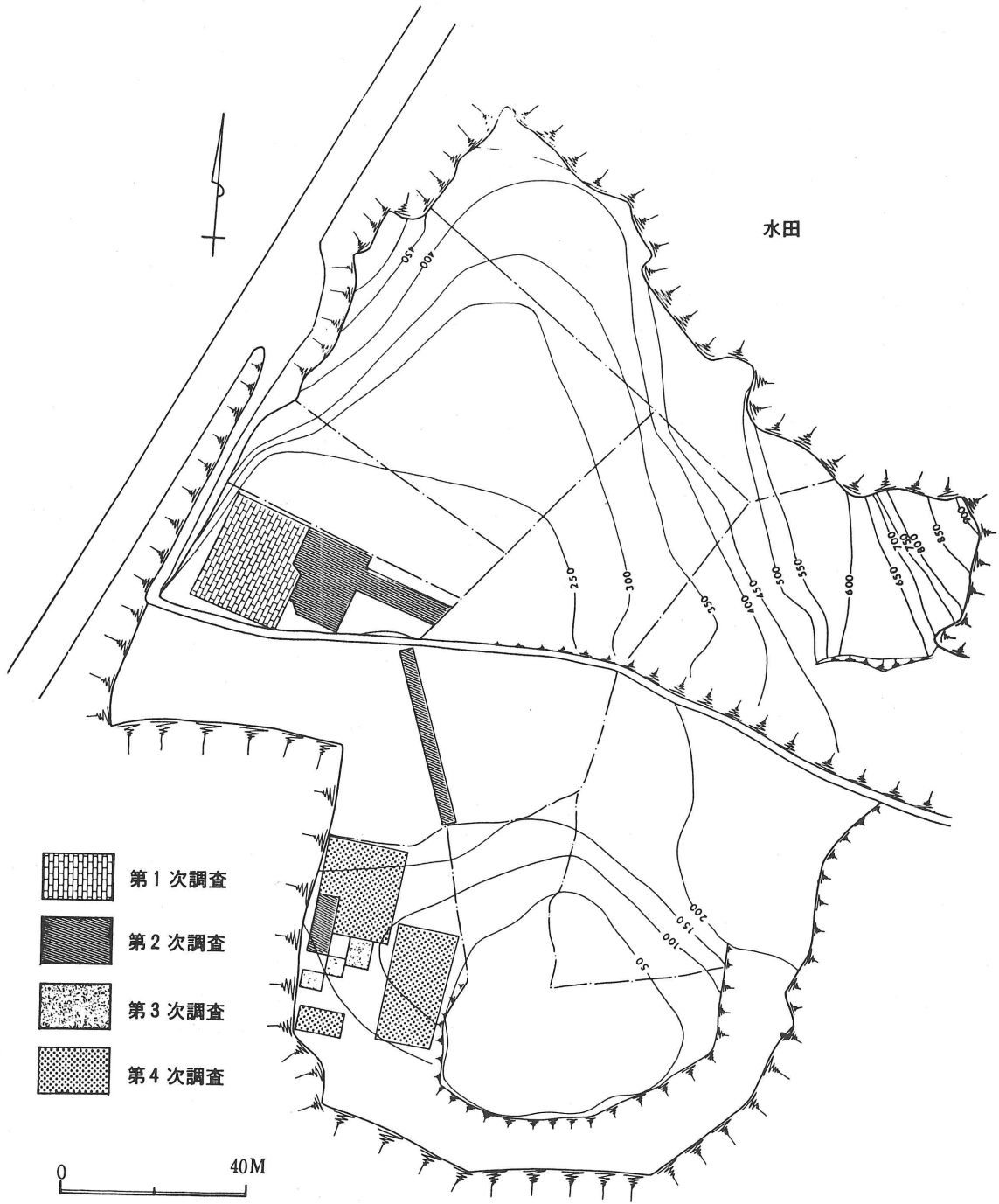
夏は、高温と雨とで雑草が地表に根を張るので地面も開口部周辺も安定し、雨水によってさえ土砂の流れ込みは起らない。しかし、空洞放置された土壌は埋りきらないまでも泥が溜り、壁体が傷み、カビやコケがはびこって次の使用には耐えなくなる。従って、堅果を取り出した土壌は、次のシーズンまで蓋で厳封する必要がある。真夏、発掘中の土壌がヒビ割れて崩壊するのは、収縮度合の大きいローム土が剥き出しにされ、連日の強い日射しに曝されるからだ。黒土から掘り込んだ袋状土壌は外圧にも強く、^ニ雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ^ニ、寒さにも暑さにも負けない相当に頑丈な構造体であることを思い知らされた。

9/5, 10/11 秋。稲が熟し、涼風とコオロギの弱々しい鳴声。開口部はそれぞれほぼ雑草に覆い尽され、周囲の草地と見分けがつかないほど。相変らず崩落も流れ込みもない。草の根が開口部の壁体を保護してしまった。

小の堆積土上面は平坦化し、開口面からの深さ70cmほど。中は壙内にも雑草、子ピット中の埋積土は平坦化していた。大の壙底にも雑草。しかし光が入らないせいで育っていない。大の壙内下半は火山灰層だが、凍結が及ばない状態（壙内下部の気温が変化しにくく、割合に暖い）から夏以降の安定状態に移行したので、結局、壙底の外周部は埋積土がない原底面剥き出しの状態が存続した。西南子ピットはかなり埋り、埋積土の上面が壙央から壙外にかけて緩傾斜を呈し、埋没の理論づけに資料を得たが、一方の北東子ピットは遂に埋没せず、自然埋没の場合、その位置によって埋没の在り方が全く異なることが分った。

以降、約1年この状態で放置したが、大・中・小ともこの秋の状況から格別の進捗を見せず、最終的に埋め戻すことになった。

自然に放置した土壌が、大幅な壁体崩落を伴いながら短期間に埋没する、とする見通しは斯くしてはずれた。しかし、この間の観察で、発掘で確認される壙底の第1次埋没土はきわめて人為的な所産であること、土壌は自然埋没を待つより埋め戻しや踏みこわしで埋積する可能性が高いこと、大・中・小のうち大が最も崩壊に強いこと、土壌の再使用には丁寧な維持管理を要すること、^ニ袋状^ニの構造体は意外に外圧に強いこと、などを把握できた。



52図 梨木平遺跡全図

(3) 土壌の累加現象

梨木平遺跡において、これまでの四次にわたる発掘調査で見つかった土壌は、1次=42基、2次=41基、3次=1基、4次=24基の合計108基である。これらのうち何基が縄文中期の所産であるかが問題で、壙内から遺物が出土している大部分の場合は判断が可能だが、伴出遺物がない場合の時期確定は難しい。後者については、厳密には難しいが形状の類似性や相互の位置関係などから検討してその大多数は中期に属すると判断した。

梨木平遺跡は、高館山の山麓丘陵のうち東へのび出した舌状台地の1つに立地する。その位置は台地の舌端部で、現況は遺跡の西側部分を村道に切断されているので台状の島のような独立地形を呈する。その中央部に比高1~2mの高みがあり、その西裾に北へのびる空堀があり(第4次調査)、中世城館遺構の存在を跡づけた。高みをとリまく北西から西側へかけて4次にわたる発掘調査が行われ、遺跡範囲約25,000㎡のうち2,168㎡で、およそ8.6%程度の面積に当たる。52図の表示箇所がそれぞれの調査場所である。3次調査では、群在する土壌地区の西縁に住居址(プランは未確認、炉址のみ検出)3軒が見つかった。それに隣接する区域は未調査のまま土取りされたが、この一角に住居址群が存在していた可能性が濃い。

第1次~4次調査で検出された土壌108基を時期別に集計すると12表のようになる。時期区分はI期からV期まで5段階になるが、その内容は別記する。土壌の合計数値は、中期集落の形成が始まるI期の18基が、II期には急減し、III期は37基でピークに達し、IV期にも継続し、V期は4基に急減している。土壌基数は抽出的な数字なので、この変化がそのまま集落の盛衰を示唆するとはいえないが、III・IV期は土器形式の上でも連続しており土壌の頻繁なつくり替えが行われるなど、活発化した暮らしが窺われ、集落が最盛期を迎えたことが分る。V期は基数が減少し、それ以降の土器形式は見られないので集落の衰退、更に途絶へ向ったものと思われる。

土壌分布の时期的な在り方はどうであろうか。各調査次の全体図に、土壌を時期区別の表示で表したものが53~55図である。

12表 梨木平遺跡検出土壌の時期別個数表

()内は推定数

時 期	対 比 期	1 次	2 次	3・4次	計
I 期	阿玉台Ⅲ/大木8a(古)	8 (2)	3	7 (2)	18 (4)
II 期	加曾利E I(古)/大木8a(新)	1	1	3	5
III 期	加曾利E I(古)/大木8b(古)	14 (2)	12 (5)	11	37 (7)
IV 期	加曾利E I(新)/大木8b(新)	8 (3)	7 (2)	0	15 (5)
V 期	加曾利E II/大木9(古)	2	2 (1)	0	4 (1)
不 明	—	9	16	4	29
		42 (7)	41 (8)	25 (2)	108 (17)

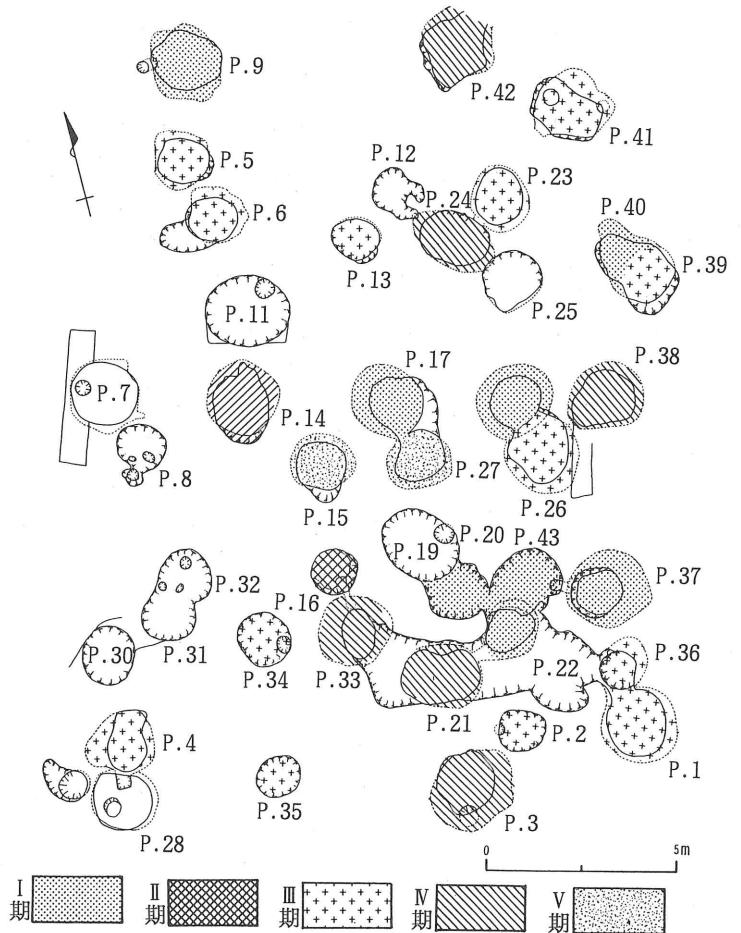
1次調査区 (53図)

I期の8基のうち図中央部に2基は隣接し、4基が集っている。その4基は重複していて、相互に接近して掘り込まれ、土壌本体が崩壊したためひと続きの状態になっている。II期は調査区で1基だけ検出された。III期の土壌は、全体に散在しているが、よく見ると他の時期と混在することが少ない。図の上辺には7基からなる一群があり、下辺の両側にも3基ずつの二つの群がある。IV期の土壌は、図下半に3基が隣接、他の3基は散在している。V期の土壌は2基だけだが、隣接している。この在り方は、同時期の土壌は隣接してつくられる傾向が強いことを示している。散在している土壌についても近隣の時期不明の土壌が同時期である可能性をも考慮すると、〈同時期の土壌は隣接する〉傾向はかなり蓋然性があると思われる。

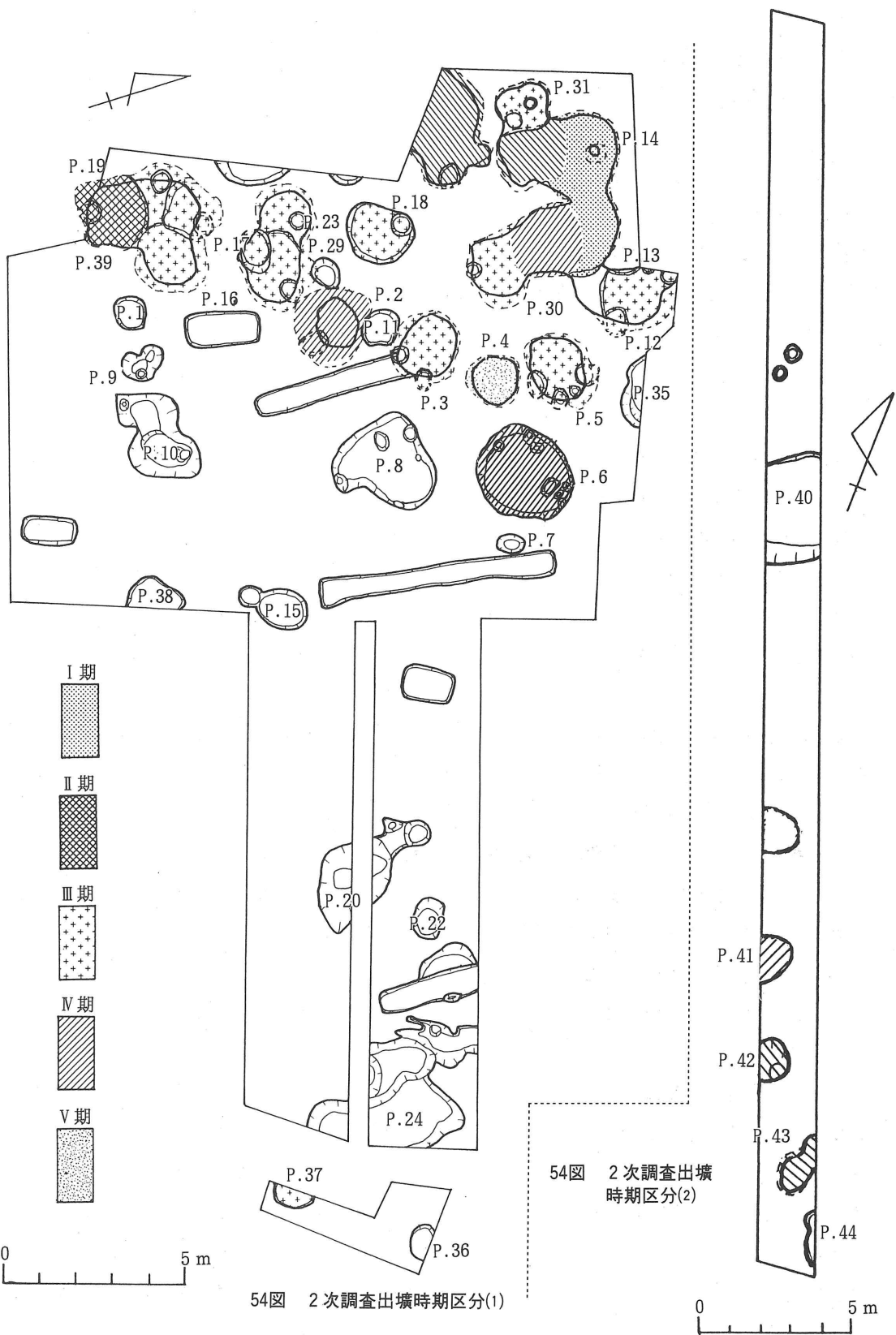
2次調査区 (54図1・2)

54図1は、原図から起したもので報告書には省かれている方形土壌が描き込まれている。梨木平遺跡が中世城館跡でもあった時期の所産と見られる。

I期の土壌は3基あり、うち2基は重複している。II期の土壌は1基のみ。III期の土壌は、図上辺に集中しており、部分的に他の時期の土壌が存在しているがいずれもIII期より新しい時期のものである。III期の土壌はひと続きの場所に集約的に構築されたもので、“隣接”傾向の典型例ともいえる。IV期の土壌も図上辺に3基の隣接状態がみられ、54図2も3基が隣接している。V期は1基のみ。2次調査区の土壌も、その時期的な分布が〈同時期の土壌は隣接する〉傾向を示しており、無秩序な選地は行われていない、といえる。



53図 1次調査・土壌時期区分図



3・4次調査区(55図)

I期の土壌は点在し、その余白部分にII期の土壌がつくられている。II期の〈土器ブロック〉2カ所は、もともと土壌であったものを掘り誤って広げてしまったもので住居址ではない。従ってII期の土壌も隣接する傾向にある。III期の土壌は調査区の北側に集中して構築されている。これらの土壌群と接して西側部分に炉址3基が検出されており、住居址が重複して存在していたことが分る。その1基は埋甕炉でIV期に相当する。その住居址群の西側は未調査のまま土取りされたが、この一角に住居址群が存在していた可能性が濃い。梨木平遺跡の調査区で、土壌群と住居址との位置関係が示されるのはこの地区だけであり、両者の時期的な関係が不明確であるが、この地区に見られる状況では各期土壌群より住居址の方が新しい。

以上のような土壌の分布状況を見ると、土壌の在り方に幾つかのクセを指摘できる。

1. 同時期の土壌は、相互に接近、重複した状態で存在している。やや散らばった状態で存在しても、それは同時期の土壌のひと続きの地区であり、異時期の土壌が介在してもそれは新しい時期のものである。

2. 二時期以上の、時期が異なる土壌が混り合うことがない。新しい時期の土壌は、古い時期の地区を避けて余白の地面を選んで構築している。異時期の土壌との重複を基本的に嫌う傾向がある。

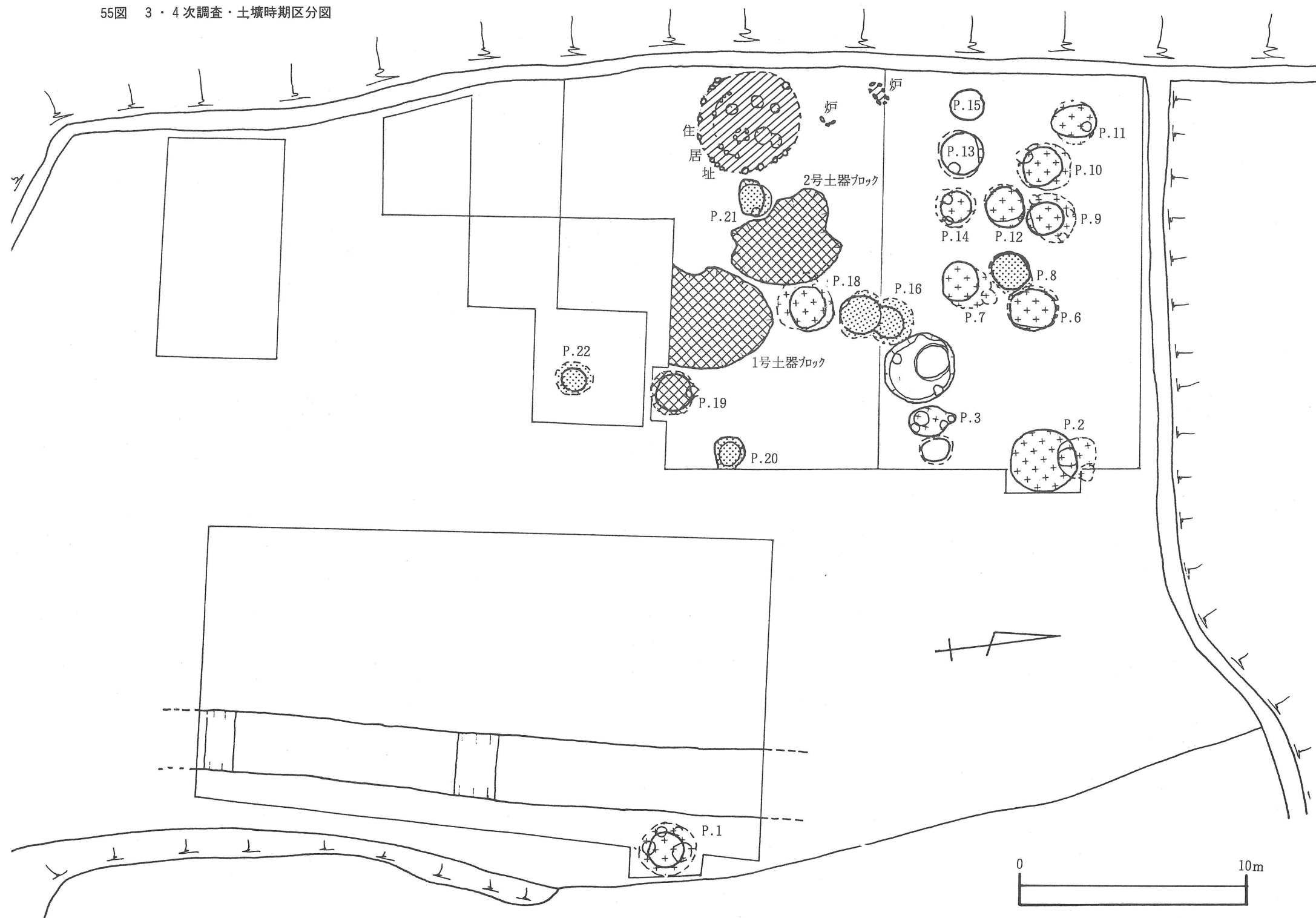
3. 局所的に集中してつくられた土壌は、時期が降るに従って“土壌地区”全域の中で余白部をつぶしながら構築され、最終的に“土壌地区”の群在化が完了する。

このように、同じ時期の土壌は同じ場所で隣接して構築され、その周辺で更新され続けていくクセがある。その場所が、土壌の過度集中により構築する余白がなくなると、新たな余白地点へ移り連続的な土壌の更新が繰り返されるのである。土壌の群在性は、単に廃絶・更新の繰り返しによる累加現象ではなく、時期毎の局所的な集中地区の総和によって形成される。それは、また土壌の複数基が併行使用されていたことをも示している。その局所的な集中地区を決定するにも、食糧の集中管理の前提に立っての選択が行われたのではなかろうか。

他の遺跡の例をみよう。

西那須野町槻沢遺跡は、北西にのびる舌状台地の尖端部で、その東側縁辺に住居址と袋状土壌の集中地区が発掘された。土壌群は北側と南側とにある住居址群の中間地区にあり、時期的には土壌の大多数が大木8a式(新)期であるのに対し、住居址は大木9式期を主体とするものであった。大木8a式期の住居址は調査区にはなく、この時期の土壌と重複して大木9式期以降の住居址があった。14号住居址(中期末?)と14H-P.2(通称30個ピット、大木8a式期)、17号住居址(加曾利EⅣ式期)と17H-炉下P.(通称炉下ピット)などの例があり、大木8a式期の

55図 3・4次調査・土壌時期区分図



※時期表示の凡例は1次・2次と同じ

“土壙地区”が2～3形式の空白期を経て“住居地区”に移行したものである。大木8a式期の土壙群と住居址群との位置関係が不明であるが、台地尖端部から東と西の縁辺に沿って住居址が馬蹄状に展開し、その内側の一部に土壙地区を包んだように存在することが全体図から予測されるので、或は大木8a式期の住居址は調査区東隣の未掘部分に土壙地区に接して存在するのかも知れない。調査状況では、梨木平例と同様に土壙と住居址と間に時期的、地区的な隔絶が見られる。

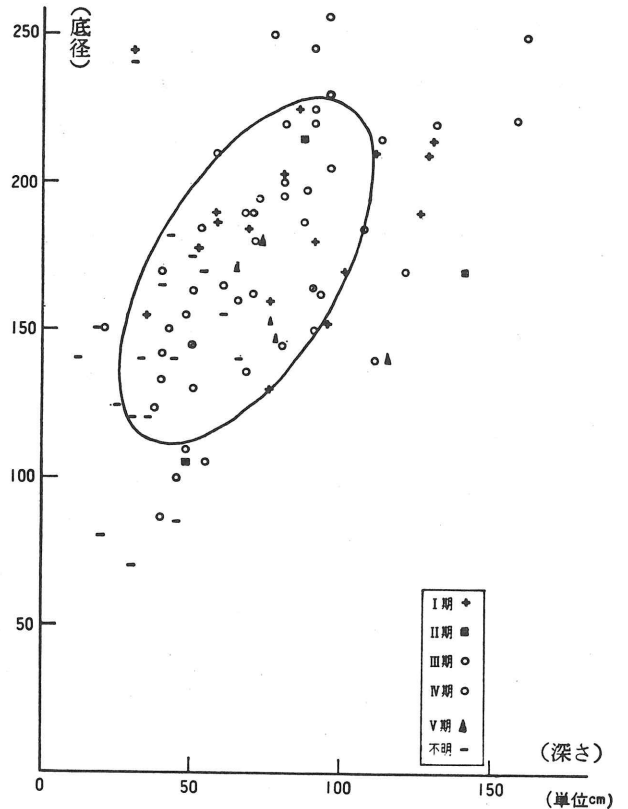
高根沢町上の原遺跡は、群在性土壙と住居址との相互の位置関係が把握できる発掘調査として注目される。時期は、大木8a・阿玉台式（最終段階）から加曾利EⅠ・Ⅱ式の計5時期がある。大木8a式期は、調査区の北端の一角に住居址とその周囲に土壙8基ほどが密集しており、この遺跡の盛時であるⅢ期＝加曾利EⅠ（新）式期、Ⅳ期＝加曾利EⅡ（古）式期には甚しい袋状土壙の累加を見る。調査中央部には、この二時期の住居址に挟まれて100基余の土壙が密集し、他の時期の土壙はほとんど存在していない。Ⅲ期とⅣ期とは土器型式の推移の上ではほとんど間然とするところなく連続した時代と思われるが、土壙群は時期毎に隣接する傾向を強くもっている。中でも一列に連って重複関係をもつJD.22, 23, 24, 25（時期不明）、26の在り方は“行列ピット”と呼称するに足る。これらはすべて重複しているので、短い年数の中で連続的に隣接地区に構築された結果であろう。同様に調査区の土壙の在り方は、同時期の土壙が局所的に寄り集る傾向をもっている。土壙群の両端に占地した住居群のうち、Ⅲ期の住居址は南端に偏し、土壙群はその北側に局所的な集中を見せながら構築される。Ⅳ期は両端につくられた住居群との関係で、Ⅲ期の土壙群をさけた余白地区を埋め尽すように土壙が構築されている。これらⅢ、Ⅳ期の土壙群に混って、Ⅱ期と覚しき土壙2～3基などが存在しているようであるが、理論的にどうであろうか。

以上のような土壙群の在り方は、先づ、群在性土壙が局所的な隣接によって継続的に構築された結果の累加現象であること、次に、同時期の住居址と土壙群とは不離不即の関係にあり、位置関係上では土壙群の管理・監視に好便な地区にあること、三つめに、集落において居住空間の移動があり、土壙群もそれに対応する形で構築場所を変えている、などの特徴を示している。

梨木平遺跡で見られる土壙累加とその分布の在り方は、槻沢遺跡や上の原遺跡での類例に見られる如く一般性をもつと理解できるものである。土壙の備貯堅果類がどの程度に人口支持力をもっていたか、積算のデータをまだもたないが、例示した遺跡のピーク期における累加現象の在り方は生業スケジュールの中での枢要の位置づけと集落の共同体の緊密な紐帯とを示唆しているように思われる。

(4) 土壌の形態

梨木平遺跡で検出された108基の土壌は、その最も一般的な形態が「袋状」で、上狭下広の三角フラスコに似た円錐台の形状を示し、壙底が平坦化されるのが特徴である。前述のように、土壌は空洞廃絶の後、自然埋没、踏みこわし、埋め戻し、或はそれらの併行作用などにより埋積しており、その多くは原形を止めていない。発掘で検出される土壌は、大小浅深の差違に加えて、袋状、円筒状、皿状、崩壊著しく原形を止めないものまで多様であるが、その形状のうちローム上面から底面までの深さと、底面の形状とは最も原形に近いといえる。それらの底面の形状が円形ないし楕円形を呈し、その面がフラットであるものを袋状土壌に準じるものとして扱うことにする。



56図 梨木平遺跡検出の袋状土壌計数値相関グラフ

土壌のうち、上の条件に適い、底径と深さの明確なものを縦軸・横軸の座標にプロットしたものが56図である。深さはローム上面からの計測値なので、当時の掘り込み面の黒色土の厚さを加えると、各ドットは何10cm分か右へ移ることになる。また、壙底は正円はむしろ少く、楕円形の最大値を採ったので、各土壌本体の底面積はやや小さめに見込む必要がある。

座標面には点のバラつきはあるが、大勢として正の傾きにのり、特に集中傾向の見られるのは図示した楕円部分である。つまり、あまり時期に係わりなく底径が小さいものは浅く、底径の大きいものは深い、という傾向がある。小土壌で底径130・深さ40cm程度、大土壌では底径220・深さ130cm程度の値をとるものが多いといえる。いま、完全な相関をもつ場合を1、全くもたない場合を0とした場合、普通、相関性が高い場合は0.8以上、低い場合は0.2以下の相関係数で表わされるという。第1次～4次調査の各時期土壌90基について計算処理したものが13表で、時期毎に土壌の壙底・深さの平均値を求め、その相関係数を算出した。これを時期毎に見ると、I期の0.3からII期の0.5へと数値が高まり、III・IV期では0.7、0.6など高い相関を示し、V期では0.8ときわめて高い相関度をもっている。V期のマイナス表示は集中が負の傾斜に表われたためで相関度

13表 梨木平遺跡 土壙規模の相関表

(単位：cm)

時 期	個 体 数	壙底平均	深さ平均	相関係数
I 期	18	182.9	79.2	0.3
II 期	3	163.3	91.7	0.5
III 期	34	172.8	74.6	0.7
IV 期	14	188.6	74.9	0.6
V 期	4	152.8	83.3	-0.8
不 明	17	142.4	40.2	0.2
全 体	90	167.1	73.9	

の高さは変わらない。この場合、計測対象の土壙数が4基なので、負の傾斜は決定的な意味をもたないとしても、プロットした点はほぼ縦に並んでおり、深さが増しても底径にあまり変化がないか、むしろ深さが減じれば底径が増す傾向を示すといえる。

楕円部分に密集する在り方は、土壙に大小の差違はあっても極端に浅くて底面が広いものや、反対に深くて底面が狭いものなどの袋状土壙の例外的な形態は少ないようである。従って袋状土壙は、「堅果類用」の他に、「根茎用」、粘土などの「素材用」とかの用途別の機能差形態を想定できなくもないが、蓋をして外気と侵入物を防ぐ構造は強度の上からも「袋状」が最適である。芋穴の如く土をかぶせて埋積する場合は収量体積の大きい直方体でよいわけなのにそれがないところから、検出事例で見る限り「袋状」の形態が貯蔵に普遍的なものであったと考えられる。

Ⅲ、Ⅳ期の土壙は、底径と深さとの数値に比例する傾向が見られ、大小にバラつきがあるところから多数の土壙が併用される中で、大小が組み合わせられて使用されたことを思わせる。Ⅰ期の土壙は、底径と深さとが共に大きくしっかりと構築されているが、大小の差違がある。これ以前の段階では円錐台部分が、底径の広さに比して高さが低めの、いわば押しつぶれた形状であるが、Ⅰ期の土壙は大きめで頑丈な構造になっている。Ⅱ期は個体数が少く傾向がはっきりしない。Ⅲ・Ⅳ期の特徴は、大小の組合せと共に、壙底に子ピットを付設することがあげられる。この規格差と付属土壙の盛行とは、この時期に袋状土壙の用途がにわかに多様化したことを思わせる。子ピットは1～4個付設され、土壙によって異なる。常設ではなく、加曽利EⅡ式以降にも類例が少い。その付設は、加曽利EⅠ式期特有の現象とも見られる。

V期は、土壙のつくりが小さくなる傾向がみられる。福島県域の中期後葉の土壙群の在り方を見ると（例えば相馬郡の上の平A遺跡など）、袋状でなく円筒状を呈していたと思われるものが少ない。本県域においては、まだ証左に足る事例はないが、中期後葉では土壙数の減少・小形化と共に、円筒状の形状が増える傾向が出てくるのでなかろうか。

土壙の時期的な特徴に、時期的な増減があげられる。梨木平遺跡における急増期はⅢ・Ⅳ期で、土器型式の存続はあるのにⅡ期、Ⅴ期には数的な減少が見られる。食糧庫としての土壙は、

住居とは別地点に構築されるのでこの減少期の土壌もどこかに群在しているのかも知れない。このような傾向は他の遺跡の調査例でも見られる。西那須野町槻沢遺跡では大木8 a (古)式期の土壌が、高根沢町上の原遺跡では大木8 b式期の土壌数が、他の時期に比べ卓越していたことはこの事実で符号している。土壌地区は特定されるので、住居と全く無縁の別の場所に群在化しているとは考えにくいところがある。この場合、急増期直後の減少化に注意したい。各時期の土壌がほぼ同じ場所に構築されたと仮定した場合、急増期の後にくる減少期の意味は、ナッツ類の不作、土壌備貯を主体としない食糧確保、時間的に短期間であった——などの要因があり得るが、最も端的な要因は集落自体の人口減少であろう。つまり、ピーク期に達した集落人口を維持しきれないため分村などの方法により人口を減少させる、という可能性である。群在性土壌が集落全体の共同食糧である限り、膨張した人口はその生業テリトリーでは維持することが困難化するであろうし、集落本体を持続する上に、分村などの対策は当然必要になるであろうからである。それは少なくとも、中期後葉における群在性土壌の衰退化傾向とは異った意味をもつであろう。

(5) 土壌の投棄遺物

空洞廃絶された土壌は、埋め戻し、踏みこわし、自然埋没などを経て埋没が進行する。その途上で遺物が投棄される。その多くは廃棄品で、土器・石器・炭化物・焼土・骨片・礫などがある。そのうち、第1次埋没の段階に投棄された土器などは土壌の年代観の近似値を示すことになる。土壌内から出土する遺物は「投棄」であり、「埋納」はない。これらの遺物は廃棄品である。廃絶後の土壌は、この意味でゴミ穴であり、遺物自体は土壌の本来的な機能に関与しないものが多い。前述した湯坂例の葦・篠竹の茎を思わせる充填土中の小穴や上の原例の蓋を想起させる炭化材、梨木平遺跡はじめ他に報告例も多い土壌の開口部や壙底付近から「詰めこむ」、「敷く」などの状況で報告される礫群などは、土壌の開口部で「蓋」の施設に係わる用材と見られるもので、その点で例外的な遺物といえる。

写真70は、4次P.8の壙底における礫の出土状態である。礫は大小62個で河原石と山礫だが扁平な礫が多い。礫は壙底に敷かれたように見えるが、壙底を被覆する混土層が薄く平坦な状態にあった時点で投棄されたもので重なったりとび散って子ピットの中にも入っている。壙底中央に一団の礫が勢よく落下し、その時に土器の破片が礫に挟まれた状態になったことが写真で分る。この破片は、壙内充填土から出土した破片を接合し写真70の下段の個体を得た。また、子ピット中に倒立して出土した写真70の上段の土器も礫群とはほぼ同時の投棄と見られる。とすれば、蓋の施設に係わるらしい礫群と破損した土器個体が同時に投棄されたことになる。この土壌は、開口部南側肩が大きく崩れており、埋没当初に踏みこわしが行われたとすれば、同時投棄はこの時点で起ったものであろう。

土壌から多量の土器個体が累々と重り合って出土する例が少くない。写真71は、4次P.18の墳底での土器の出土状態。この土壌は、壁体北側が大きく崩壊し、その壁体をなしていた今市層土が舌状に雪崩こんで墳底を覆っていた。踏みこわしによる崩壊と見られるもので、その崩落土の斜面に、長さ70cmほどの長大な石をはじめ礫、破損した土器個体＝片口型の注口土器・大形の甕形土器・2点のキャリパー状深鉢などを一括投棄した。その際、土器破片や小礫は斜面を滑り降りて墳底南側の壁ぎわに寄りついて止まり、重量のある長大な石は斜面中位に止まった。この場合、割れた土器や不要の礫は別の場所に溜めておいたものを一括投棄したフシがある。土壌埋没の初期にしばしば行われる土器の一括投棄は他の遺跡でも類例が多く、殊に大量の土器個体が投棄されていた例を14表に掲げる。これらの個体はほとんどが破損品であるが、表中の1, 4には完形品もある。個体と共に土器破片や石器破片、礫なども出土するところから、別な場所に溜めておいたこれら器形を一括投棄するものと考えられる。この種の投棄行動は、食糧貯蔵の施設を「捨て場」化するもので一見まことに奇異な習慣である。

土壌から出土する遺物では、土器・石器・礫など本体のまま依存するものが目立つのでこれらが主体的な遺物であるかの如き感があるが、実際には有機物や焼土などの投棄も併行して行われていたと考えてよい。

梨木平1次P.7とP.22とからクルミ、槻沢遺跡17H-P.3から焼土・炭化物片を含む層にシカ幼獣下顎骨片（焼けている）とクルミの殻、などの出土例がある。食物の残滓や炉の燃えかすなどの投棄を示すものである。秋田県杉沢台遺跡（前期）、千葉県高根木戸遺跡（中期）では土壌内に貝殻が投棄されていた例もある。鳥獣魚介、植物性各種食糧など日常生活の生ゴミの出ることは必然であり、その投棄に廃絶土壌の空間が利用されたと見てよいと思われる。この意味で破

14表 栃木県：大量の土器個体が出土した土壌

No.	遺 跡 名	遺 構 名	出土個数	時 期
1	西那須野 槻沢	14H-P2	31	大木8 a 新
2	"	17H-炉下P.	19	"
3	大田原 湯坂	T1-V区P.	27	大木8 a 古
4	高根沢 上の原	J D-12	20	"
5	小川 浄法寺	N-21区P1	14	加曾利E I 古
6	市貝 添野	土壌34	11	"
7	黒羽 不動院裏	F-17	11	大木8 b
8	宇都宮 後田	S K662	17	大木8 a
9	"	S K476	17	加曾利E I 古

損した日常什器＝土器や木器，各種器具＝石器，編物，骨角器，その他，も同じ投棄品である。土壙には，これらの各種廃棄物が空洞の壙内に投げ込まれたものであろう。

このような投棄の在り方を見ると，単に土器のみの一括投棄ではなく日用廃雑物等も同様に投棄されており，土器・石器も含めて破損品・廃棄物の投棄行為と考えてよからう。土壙地区は日常起居の場に最も関係深いところで，そこが捨場の役割も果すこともその機能に關与しているであろうか。大量個体の一括投棄という奇習が，「吹上パターン」のように土器づくりの更新に伴う投棄行為として説明できるかどうか，まだ納得できる答えが出ていない。生命維持の根幹に係わる土壙地区にゴミ投棄を行う習慣に，再生を願う儀礼的な意味を付加すべきであろうか。集落空間の一角に捨場が形成されるケースも多々あり，今後は調査事例に基いて集落全体の在り方から土壙への廃物投棄の意味を検討していかなければならないであろう。

(6) 土壙の用途

袋状土壙の基本形態は，地表に狭い円筒状の穴を掘りその下方を断面が三角フラスコ状を呈する状態に掘り広げるもので，壁体がオーバーハングすること・壙底がフラットになることが特徴である。発掘時にはローム面で開口部が確認され，そこから排土した形状が図示されるが，原形の円筒状の開口部や繰り返された壁体崩落等を考慮すると少くとも原形から変形していることになる。土壙自体の断面形も壙内埋積土の在り方を検討しないと，“袋状”か否か判断が不正確になる。その点で壙底と確認面から深さが比較的変りにくい数値といえるが，深さの方は上層の黒色土を考慮に入れずに〈浅い〉とか〈皿状〉などと判定しても原形をいい当ててはいえない。ともあれ，北関東の中期遺跡には群在性の袋状土壙が卓越している。土壙群は何故に“袋状”を指向するのであろうか。

入口が狭く内部が広い穴は掘削しにくい。内部に物を納入するためだけなら方形箱状の方が掘りやすいし量も多く容れられる。それを円錐台の形状に仕上げたのは，小さな蓋で開口部を塞ぎ外圧にも耐えられる形状が用途に適ったためであろう。蓋の開閉により内容物の取り出しが自在に可能となる。即ち，“袋状”の形状は貯蔵の用途に叶った穴なのである。埋積により貯蔵物が土と混合しないために，蓋をして容積を空間として保つ必要があった。その貯蔵物が堅果類である。小粒でまとまりにくいこの物質は，常食とするために大量に長期間——少くとも次の秋の採集期までの間は変質せずに保存せねばならず，定温で気密性の高い袋状土壙はその条件に合致していた。

永瀬福男の実験によると，蓋をした土壙は冬季にあっても，外気の変化とは関係なく温度は2℃で，湿度は82～93%であり土壙内は凍結することはなかった，という。

土壙が袋状を呈するのは，貯蔵における一般形であり，この形状が草創期から弥生時代に至る

まで見られることも周知である。サツマ芋やゴボウの如く土で埋積できる物質と、土の混入を嫌う堅果類や穀物などの物質との違いから袋状の形態に至ったものとする。この場合、壙内に堅果類をバラ積みすることはなかったであろう。取り出し易いように俵や袋に類する容器に詰めて納入したのではないか。壙底が平坦化されていることも、〈置く〉機能に沿っていると思えるし、後述する子ピットの機能が特別貯蔵の役割を果たすとすればバラ積みは混在を招くマイナスになるからである。

ところで、土壙の大小浅深と形態との関係はどうであろうか。57図は、時期別に土壙形態の特徴的な事例を掲げたものである。

1は、黒羽町・不動院裏遺跡F.9で阿玉台式中葉の所産。ローム上面の口径が125×130、深さ61cm、底径204×224cmの極端な上狭下広で、壁体のオーバーハングが著しい。この時期に多い型である。壙底から浮いた状態で阿玉台式土器個体が出土。投棄によるもの。開口部の直径が大きいことは、土壙廃絶後の壁体上半部分の崩落がかなり激しかったことを示しており、この型の形状は上からの外圧に特に弱いこととも関係している。底径が大きいのに浅い掘り込みであったため、極端な上狭下広型になるわけである。このように土壙が外圧で壊れやすい形状を呈しているのは、長期耐用の目的に反する。短期的、暫定的な使用意図に関連するものであろうか。

2は、西那須野町・槻沢遺跡(昭和52年度調査)のP.59Cで大木8 a式期の所産。ローム上面の口径が95×97、深さ133cm、底径が218×224cmで、三角フラスコの形状を呈する袋状土壙の典型例。壙底から浮きで大木8 a式・阿玉台式末葉の土器8個体が出土。開口部には礫がブロック状に存在。礫・土器ともに土壙廃絶後、埋没途上での投棄によるもので、礫は埋没終期の投棄である。当遺跡での該期土壙は、ほぼ同様の形状。大きくて掘り込みが深く豊かな容積をもち、壁体も外圧に耐え得るなだらかなカーブを描く頑丈な造りになっている。開口部の原形(円筒部分)は失われているが、袋状の本体は原形に近い状態を示している。こうした構築の在り方は、貯蔵物の増大と貯蔵方式の確立に関与しているように思われる。共同体の堅果採取が組織的に行われ、土壙管理の習俗が普遍化した様相を推察させる。

3は、上河内村・梨木平遺跡第4次調査P.9で、加曾利E I式(古)期の所産。ローム上面の口径が約100cm、深さ130cm、底径約220cmで円錐台の形状を保つ袋状土壙。当地方のローム最上層の田原ロームを掘り込んで構築。田原ロームは上部の軽石層=七本桜・今市層と下部の褐色ローム(小川スコリア層を含む)から成り、この土壙は深部の小川スコリア層をも掘り抜いている。

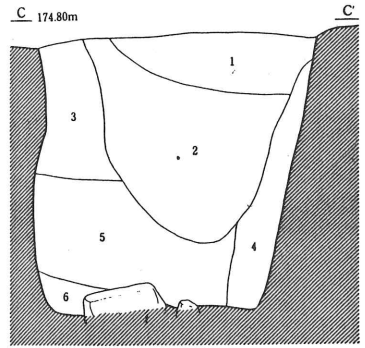
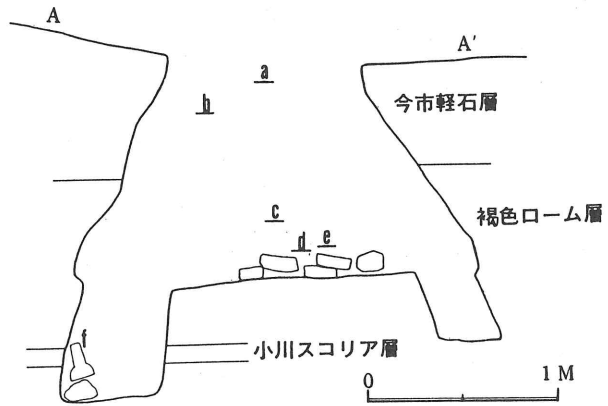
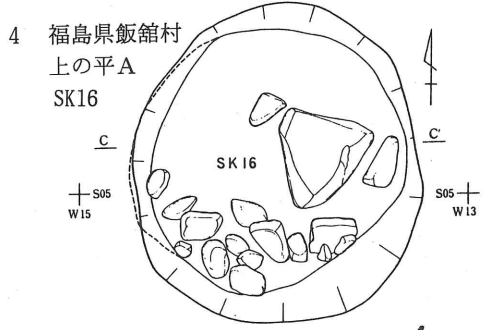
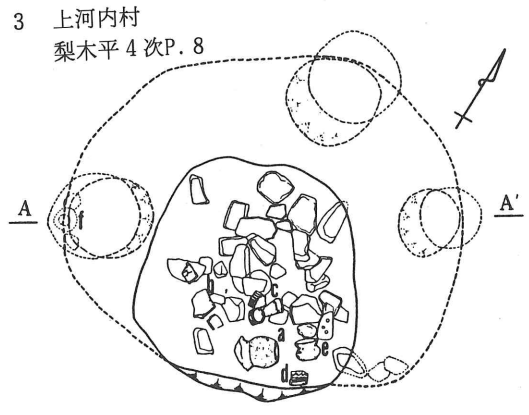
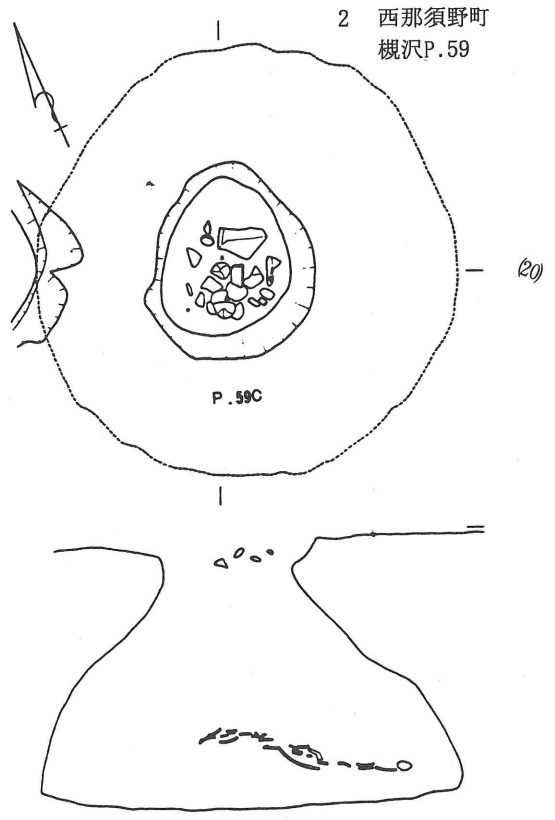
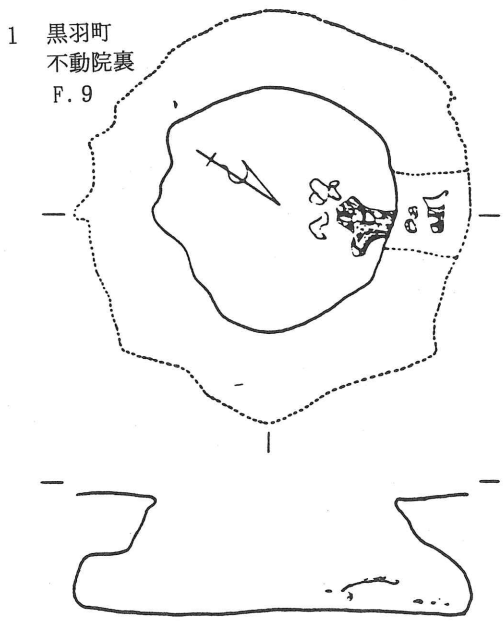
七本桜軽石層及び今市軽石層は粒状の組成なので、土壙の壁体になった場合崩れやすいが当遺跡の土壙には、壁体がほとんど今市軽石層であるものも多い。目的の大きさと深さを確保すれば事足り、とするもので壁体の脆さから長期使用には耐え得なかったものと思われる。

この土壌は、墳底に礫が投棄されており、墳内から a～f の位置で土器個体・大破片が出土しているが、このうち e は破片となって埋積中と礫に挟まったものが出土しそれらが接合したことから、土壌廃絶後の一括投棄と分る。この土壌の特徴は、墳底の壁ぎわに掘り込まれた三つの子ピットである。これらの子ピットも壁をムラなく整形し底面を平坦に造り出した“親”と相似の形状を呈し、図の f の土器が外壁に接し倒立で出土した状況から“親”と“子”は共に空洞状態で廃絶されたことが分った。両者が同時的に機能していたもので、子ピットは空洞状態で使用されたのである。親土壌の上屋を支える〈柱穴〉としての機能などあり得ない。土壌の構築地区は排水のよい高台や傾斜面で、土壌は帯水層を持たないローム層中に掘り込まれている。梨木平遺跡はじめ県域各遺跡の調査にあっても、土壌内に湧水をみる例は皆無であったし、降雨による長期帯水の事例もなかった。“水抜き穴”など全く不要であり、子ピットの機能をこれに求めるなどはまさに場あたりな空論に過ぎない。まして土壌内の帯水により貯蔵中に堅果類のアクを抜くなど、当地域の発掘例に関する限り到底考えられない。

梨木平遺跡 4 次調査で見つかった子ピットつきの土壌は 15 基で、うち 12 基が加曾利 E I 式（古）期の所産。子ピットは“親”の大きさにあまり関係なく設けられ、その個数も 1～4 個で一定しない。上の原遺跡では、加曾利 E I 式（新）期の土壌 52 基のうち 26 基、加曾利 E II 式期の土壌 75 基のうち 33 基に子ピットが設けられていた。子ピットの設置例は阿玉台式末葉の土壌にもないとはいえないが、一般化するのには加曾利 E I 式期からであり、加曾利 E II 式期ころまで盛行し、中期末葉にはまた付設されない傾向をたどる。秋田県杉沢台遺跡では、縄文前期（円筒下層 A～D 式期）の袋状土壌群が住居地区をとり巻く斜面に存在しているが、墳底縁や床面に溝と子ピット（ほとんどは 1 つ）を伴う土壌が確認されている。報告書から数えてみたところでは、「フラスコ状ピット」109 基のうち 45 基に子ピットがある。記述によると「床面からの排水機能を持つのではないかと想定されるが、溝、ピットを持たないフラスコ状ピットもあり、断言できない」（永瀬福男）という。

これらの例からみると、子ピットの付設は北関東では中期中葉の袋状土壌盛行期に見られる目立った慣行といえるが、その表われ方に地域差があるようである。その出現は、時代的な因子ではなく、それぞれの集落盛期における要請に基くものなのかも知れない。

再び、図の 3 に戻って、3 個の子ピットは墳底壁ぎわから外傾して掘り込まれている。子ピットが“親”と相似の形状を呈することから、単に墳内の空間を拡大するためではなく、“親”同様の貯蔵機能をもっていたと考える。土壌内の空間の中でも最も空気対流が少いこの小空間は特別に保存すべき物質を格納貯蔵する特別室ではなからうか。この特別室が、同時期の土壌の半数以下の程度にしか設けられないことから、子ピットは土壌の付設として必然のものではなかった。付設の意図が偶発的でないとしたら、“親子”コンビの相乗効果による貯蔵機能を想定すること



57図 各時期の袋状土坑

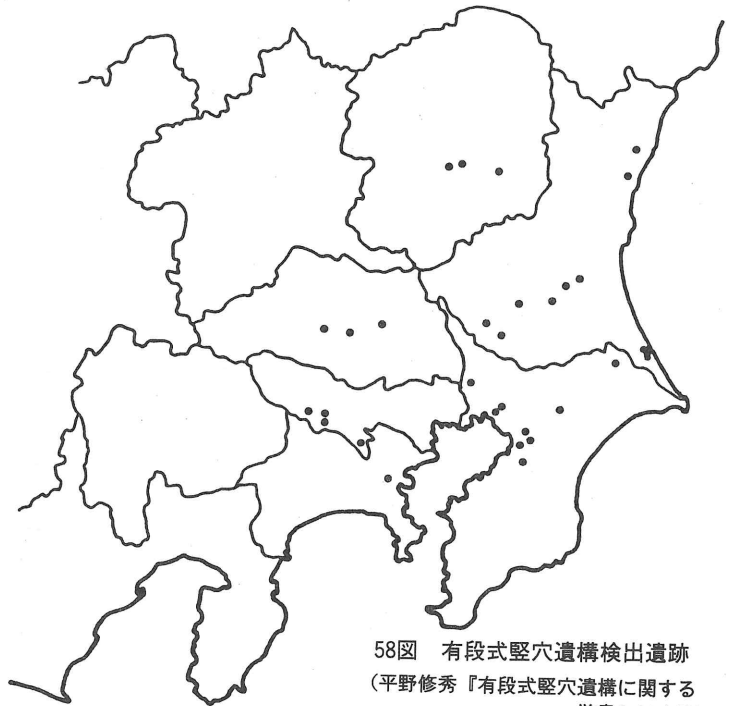
はできまいか。

4は、福島県相馬地方の真野ダム水没地域内にある飯館村上の台A遺跡S K. 16で、中期末期の所産。中期末葉3基・後期前葉6基を含む15基の中の1つ。口径120cmを越える大型と、80cm内外の小型の二大別があるが、本例は口径145×165cm、深さ145cmで断面形がピーカー状を呈する。礫層に掘り込んだもので、壁体が砂利層にあたっている部分もありもろい、という。埋積土の断面から、この土壌が漸移埋没していったことは窺われるが、原形が袋状か否かは不明。当遺跡発見の中・後期所産の土壌は、その多くが前述の「小型」で掘り込みも20~40cm程度で浅い。上の台遺跡の南側に接続する日向遺跡の調査でも、中期末葉の住居址5軒の集中地区で、住居址の間隙に土壌16基が点在しており、そのうち少くとも5基が住居址と同時期であり、中期末の貯蔵穴は住居近傍に造られることが確認されている。口径150、深さ60~70cm程度で円筒状の形状を呈するのが特徴。埋積土や投棄礫などの在り方から崩壊による変形も考えられるが、土壌自体の小型化、基数の減少、散在化などの傾向が窺われる。土壌地区特定による重複累加の現象が変転し、住居址近傍に少数基数が営まれる様相は共同体生業の変化——採取対象の堅果類が量や種類などで変化?に係る動きを示唆しているのかも知れない。以上のように、北関東を中心とする群在性土壌は、阿玉台式末葉段階で発現し、加曽利E I・II式期の最盛期を経て、中葉末葉は衰退期に向っている。土壌の在り方も、基数・大きさ・袋状の形状、盛時における子ピットの付設など時期的に変化しており共同体生業の様相を反映しているように思われる。

(7) 群在性土壌と二段床住居

住居址の床面を方形に掘りくぼめ、二段の床面をもつものを二段床住居と呼称しておく。その形状は楕円、隅丸方形の住居址床面にひと回り小さい方形の掘り込みを行うため、当初の床面が幅1m前後の周帯のように残るので「ベンチ状」「ベット状」「有段式堅穴」遺構の名がある。北関東でも、近年検出例が増え集落において果す機能が問題視されてきた。

栃木県内の検出例としては、高根沢町上の原遺跡の3棟、宇都宮



58図 有段式堅穴遺構検出遺跡
(平野修秀『有段式堅穴遺構に関する覚書』による)

15表 関東地方の二段床住居検出遺跡

県	No.	遺跡名	遺構数	県	No.	遺跡名	遺構数
栃	1	上の原(高根沢町)	3基(2H, 4H, 9H)	千	11	海老ヶ作	1基(13H)
茨	2	諏訪(日立市)	2基(1H, 2H)	埼	12	高井	1基(22H)
"	3	大作台(石岡市)	2基(1H, 2H)	"	13	芦刈場	1基(3H)
"	4	下広岡(桜村)	7基(4H, 8H, 10H, 18H, 39H, 54H, 68H)	"	14	中野台	1基(1H)
"	5	小山台(荖崎村)	2基(1H, 2H)	東	15	多摩ニューNo.46	
"	6	上の代(日立市)	1基(3H)	"	16	宮田	
"	7	東大橋原(石岡市)	1基(1H)	"	17	宇津木向原	
千	8	磯花(佐野市)	1基(8H)	"	18	岳の上	
"	9	高根木戸(船橋市)	1基(9H)	神	19	細田	
"	10	蕨立(千葉市)	3基(1H, 12H, 24H)				

(中野修秀『有段式竪穴遺構に関する覚書』に基づき作成)

H：住居址

市御城田(旧称は後田)遺跡の2棟があるが、関東各地の遺跡でも既報の類例が多い。中野修秀の論考によると、二段床住居を検出した遺跡は58箇の如き分布を示すという。15表は、その論文に提示された遺跡・遺構名を便覧上まとめたもので、19遺跡・26遺構になる。(図中、遺跡の所在を示すドットは、栃木が3、茨城が8、千葉が9で、それぞれ付表の遺跡数より多いが、遺跡名をあげないものも含めての分布であろう)

これら遺跡の分布は、多摩丘陵を西限とし大木系土器の分布域と合致するといひ、勝坂文化圏にある東京・埼玉・神奈川各県の検出例も「大木系土器の分布範囲にすっぽりと納ってしまう」といふ。更に、この分布域は、「縄文中期におけるフラスコ状土壌の分布範囲ともほぼオーバーラップする」と指摘する。関東地方で検出された阿玉台期住居址を集成した鈴木美治は、「二段掘り込み」を呈する「C-3-a」型の住居跡は、阿玉台Ⅲ式期から出現し炉をもたない例が一般的なようである(注：時期区分は西村編年)とし、関東地方で二段床住居が阿玉台期末葉に出現することを明らかにした。この見解を発展させて、中野は、「有段式竪穴遺構を、阿玉台Ⅲ式期に他地域の影響によって出現した、異系統の竪穴住居址」と括り、その発現を東北地方北部に求めている。

北関東における群在性の袋状土壌は、大木8a式が唐突に浸潤すると同時期に出現する。その時期は関東様式の阿玉台式がまだ盛行している時期で、その影響圏は北関東及び東関東であった。群在性土壌が意図する食糧管理の方式を受容することと、大木様式を受容ないし影響下におかれることが合致したのは意義深い。土器様式圏は地域集団の基層的な生業慣行をも包括する

一事例といえる。

二段床住居も、堅果貯蔵の管理方式の一要素としてもたらされた。関東圏において全く前例のないこの異系住居が、群在性土壌の出現と軌を一にすることは、貯蔵管理を行う上で必要な施設であったからであろう。二段床住居は、群在性の袋状土壌が存在する遺跡に限って検出されるが、その棟数は僅少であり、遺跡数も少い。その意味でも、関東在地型の一般住居とは性格を異にする特殊住居であり、袋状土壌の使われ方に密接に関与する施設と思われる。16表に、栃木＝

16表 関東地方の二段床住居事例

数値単位：cm

遺跡	遺構名 時期	概形 炉の有無	外寸	内寸	備考
① 上 の 原	2H 阿玉台末	円 炉なし	530×460	345×245 深さ30	下段床の壁ぎわに4柱穴あり、周溝あり
	4H 加曾利EⅠ新	不整円 炉なし	590×527	390×320 深さ20	下段床の壁ぎわに4柱穴あり
	9H 加曾利EⅡ	方 炉なし	745×550	565×275 深さ40	下段床の壁ぎわに4柱穴あり。大8b土 壌3基の跡地
② 大 作 台	1H 阿玉台末	方 炉なし	495×460	300×300 深さ30	下段床に小穴9
	2H 阿玉台末	方 炉なし	480×450	260×260 深さ30	下段床の四隅に柱穴あり
③ 諏 訪	1H 大木8a	方 炉なし	412×482	232×284 深さ12~15	下段床に4柱穴あり
	2H 不詳	六角? 炉なし	200~250 (一辺)	220×270	下段床は方形、四隅に柱穴あり
④ 下 広 岡	4H 阿玉台末	方 炉なし	620×530	420×350 深さ35	下段床の四隅に柱穴あり
	39H 阿玉台末	方 炉なし	1,032× 649	795×405 深さ27	下段床の壁ぎわに6柱穴あり
⑤ 子 和 清 水	28H 阿玉台末	方 炉なし	576×488	352×288 深さ16	下段床の東壁は上段床のそれと一致、両 床は長軸が直交
	31H 阿玉台末	円 炉なし	560×552	296×272 深さ8cm	下段床は方形、四隅に柱穴あり、東北辺 は掘込みなし
	125H 阿玉台末	長方 炉なし	736×464	464×456 深さ16cm	下段床の四辺のうち、東・西辺は上段床 のそれと一致
	132H 阿玉台末	方 地床炉	584×456	384×352 深さ8cm	上・下段床の長軸が直交、上段床の長辺 は張り出しあり

※①～⑤の資料は、各報告書に基いて抽出。⑤の数値は、実測図から算出した計測値

※Hは住居址の略称

上の原遺跡（高根沢町）、茨城＝大作台遺跡（石岡市）・諏訪遺跡（日立市）・下広岡遺跡（桜村）、千葉＝子和清水貝塚（松戸市）から検出された二段床住居の事例を揚げ、その特徴を眺めてみたい。

概形は隅丸長方・楕円か円などで、長軸をもつ上屋構造体が考えられる。規模は、長辺が5～6m程度で（下広岡39Hは10m余で例外）、一般住居と大差ない。下段床は、上段床の同心状に掘り込まれ深さ20～30cm、幅50～100cm程度の“周帯”が廻る形態になる。下段床の四隅か壁ぎわに柱穴があり、下段床の空間を広くする構造をなすらしい。子和清水28Hは上・下段の東壁が重なり、その部分が〈二段床〉にならないばかりか、両者の床は長軸が直交する形態で同心状にならない。同132Hも同様の構成をとるが、上段床の長辺を張り出させて“周帯”を確保している。

出現するのは多くは阿玉台式末葉。上の原9Hは、大木8b式期土壌の跡地につくられており加曾利EⅡ式期。御城田遺跡でも同例があるときく（詳細未報告）。屋内に炉がないこともひとつの特徴だが、これを以て居住性を否定するより、阿玉台式住居の一般的傾向と解すべきか。

二段床住居の上屋構造は、下段床の空間を確保し、上段床での起居にも十分な空間を得る必要上、堅穴概形の長軸に棟をもち壁体を伴うものと考え。東北地方北部に発現した大型住居＝ロングハウス形態を継ぐ構造体である。下段床は、その深さ20～30cmほどで、ひと足で降りられる程度。その広間に座って“周帯”を利用する作業——などの機能が考えられないか。群在性土壌と強い関連をもって受容された二段床住居には、二段目の床が機能上で殊に重視される理由があった筈で、関東在地の前期末以降の一般住居とは異質の在り方を示す住居の新様式であった。住居群の中でも僅少な存在であるこの住居に、堅果類貯蔵に伴う作業施設としての機能を考えた。その意味で、諏訪遺跡の二段床住居について「選果場」の機能を想定した鈴木裕芳の見解は、群在性土壌との位置関係を考慮して“専用施設”の性格を付与しようとするもので、ひとつの有力な解釈といえる。

堅果類の大量貯蔵を行う場合、採取した堅果を土壌に直行させることはまずないであろう。採取・積置・乾燥・選果・袋詰・貯蔵、などの手順を経る必要がある。大量貯蔵の前提として乾燥、選果の作業は必然であり、干し場や専用施設は不可欠であろう。貯蔵に至る一連の作業過程で二段床住居はその要の役割を担ったものと考え。その床面の硬軟や炉の有無は継続住居を示唆することはないが、群在性土壌との関連で見ると、専用施設を有力視すると炉の存在が認められるものでも常住家屋とは考えにくい。土壌群が野外貯蔵の施設であるから、二段床住居が乾燥貯蔵を兼ねる貯蔵小屋とも思われたい。一般住居とは性格を異にする作業の専用施設と理解しておきたい。

二段床住居は、杉沢台遺跡（能代市）の調査例から縄文前期の前葉に群在性の袋状土壌と強い関連性をもって東北地方北部で出現したと見られる。調査報告によると、円筒下層A・B・C・

D式期の各時期のうち群在性土壌に隣接してつくられた住居群は、大型4・中型5・小型35軒に上るといい、大型及び中型住居は全て二段床であり、その多くが複数の地床炉を備えている。前期後葉に至って大型住居が出現、長軸の棟持ち柱の間に地床炉があり複数の家族集団が常住したことを示唆している。この遺跡で検出された長軸32・短軸9m、ベンチ状床幅2mを測る大型住居＝ロングハウスは6基の地床炉をもち、四期の建替えを経ており、長期居住の様相を強く示している。

鳩岡崎遺跡（江釣子村）の調査例では、前期末葉の大木6式期にロングハウスが出現し、次の大木7a式期にはロングハウス・一般住居と群在性土壌が密接な位置関係を保って出現している。ロングハウスは二段床で複数の地床炉を伴っている。前期以降の在り方が中期前葉に継続しているわけである。二段床の大型住居に複数の単位小集団が同居する方式は、この時期に東北地方北部における〈食糧管理〉集団の共同体としての特徴といえる。端的には、大型住居を必要とする共同作業が行われたことが予測される。群在性土壌が野外の貯蔵施設であり、大型住居は貯蔵に伴う作業施設とその作業に係わる単位小集団たちの居住家屋であった。地床炉の数が単位小集団の数を示唆しており、一つの家屋に長期間起居する点で共同体の紐帯の強固さに驚かされるが、それを必然とさせるほどの前提があったということで、その要因として共同作業を有力視したい。

群在性土壌による食糧の管理方式は大木圏の強盛拡散に伴って北関東にもたらされた。二段床住居もその方式における要素として受容された。堅果貯蔵の基本パターンにおいて不可欠の要素であったからであろう。ただ、関東地方にあっては、一般住居は伝統的なものを継ぎ、二段床住居は作業施設の役割に加えて長期居住の場となることはなかったように思われる。集落での棟数の少なさが二段床住居の特異な性格を示すと共に、恒常的な居住家屋としての在り方を否定していると理解しておきたい。

2. 群在性土壌の意義

北関東にあって縄文中期に盛行する群在性の袋状土壌がいかなる役割を担い、その社会を特徴づけてきたか、調査事例に即しながら述べてきた。ここで今一度それらを整理し、群在性土壌のもつ考古学上の意義について検討しまとめとしたい。

(1) 「袋状」形態が意味するもの

地面に掘り込まれた穴である袋状土壌は、狭い開口部と壙内が広がる上狭下広の円錐台の形状を呈し、壙底は平坦化され、大小の差はあってもほぼ同形態である。平坦な壙底は〈置く〉機能に通じ、円錐台の形状は密閉して内容物を保管することに適し、その構造は外圧によく耐える。土壌は空洞廃絶されたことを埋積土——多くは踏みこわし・埋め戻しにより廃棄品・不要品の投棄を伴う、の在り方が示しており、壙内保管物の一括取出し後に土壌が廃絶されることを示唆している。

壙内保管物は、土との混合をきらい外気から遮断して長期的保存を要するもの——永瀬福男の観察の報告によれば、土壌底部の気温は年間平均12℃（密閉）ではほぼ常温を保つという。土壌の体積はかなり大きく、4次P.18のデータ＝開口部径175・深さ160・壙底径250・子ピット1、によれば“親子”合計の推定収容量は4.59m³。大量貯蔵を可能ならしめる構造体で、しかも土壌自体の耐用期間は短く次々に更新されていく。これらの状況資料から総合して、土壌の保管物は当時の常食とされたクリ・クルミ・ドングリ・トチなどの堅果類と考えられ、種別に収穫期を追っての採取貯蔵が行われたものと見られる。

堅果類は多種あり収量が豊かであるので、入手が容易であると共に大量に確保することができ、堅果自体は滋養豊富で可食部分が多く長期の保存に耐える。常食としての条件が十分に備っており、穀類に匹敵する人口支持力があると考えられる。ヒプシサーマルに後続する縄文中期の温和な気候が実り豊かな落葉広葉樹林を育み、それを生業のベースとしたひとつの帰結として袋状土壌による堅果類の貯蔵方式が成立していったのであろう。気候のめぐり合せで、堅果類には豊凶がつきまとうから、不時に備えて貯えることは常食としての義務であった。常食確保、採熟能率などの面から〈生り木〉の管理もまた必然とされたであろうことも想像にしくはない。

袋状土壌の盛行情期——加曾利E I式（古、新）式期に壙底に子ピットを付設する傾向が顕著となる。その前後には見られない傾向なので短期間の北関東的な在り方なのかも知れない。子ピットは、“親子”と相似の袋状で底面は平坦、多くは壙底壁ぎわに寄って1～3個程度がつくられる。調査状況からは、“親子”は共に空洞廃絶されているので、子ピットは同様に貯蔵機能をもつものであり、柱穴や水抜き穴などの用途は考えられない。“親子”コンビの貯蔵機能、“親子”の補助的

な機能，“特別室”的な貯蔵機能などがありそうだが、立証に至らない。子ピットの出現により、土壌の貯蔵機能が多様化したことを示唆するものの短期間での様相なので今後の検討が必要であろう。

(2) 「群在性」の意味するもの

地中に穴を掘り食糧を貯蔵する場合、基本形態は上狭下広の「袋状」である。その形態は草創期以降弥生時代に至るまで同じであり、野外の貯蔵施設として袋状土壌は最も普遍的な存在である、とあってよい。北関東の縄文中期にあって袋状土壌が問題視される焦点は、それが群在する事実である。

袋状土壌が群在するのは集落空間における構築場所を特定し、継続的な更新と廃絶とを繰り返すためそれらが累加するからである。更新はある年数の耐用期間を経て行われるが、同時期の土壌は局所的に集中する傾向があり、それは複数の土壌が併行使用されていたことを示すと共に、隣接地区での連続的な更新があったことを物語っている。その局所と住居とは密接な位置関係にあり、高根沢町上の原遺跡では阿玉台式期では住居の周縁、加曾利EⅠ式期では住居に挟まれた中間位置に、その時期の土壌群が構築されていた。西那須野町槻沢遺跡では、台地縁辺に帯状に展開する住居群の中間地帯に土壌群があり、その対辺でも同様な状況が見られるところから、舌状台地の端部の縁辺に沿う馬蹄形状に住居址帯が展開しその内側に広場を有する集落構成をとるものと思われる。この場合、袋状土壌群は両辺の住居址群の一角にそれぞれ構築されていたことになる。集落構成上で袋状土壌群と住居群との位置関係が明確な調査例は少ない。秋田県杉沢台遺跡（前期末）では、台地平坦面のロングハウスを含む住居群に対しそれに続く緩斜面に袋状土壌群があった。

岩手県西田遺跡では、環状集落（住居群・長方形柱穴列群・墓壙群）の北側部分に貯蔵穴土壌群＝大木8a式期が存在しており、この区域は河崖が低地部分に突出した微地形的に一種の独立地形をなしている。外部から侵入を妨げる急崖に囲まれた狭い平坦面で、後背に占地する環状集落との関連性が強く、土壌群の集中管理に最適の位置にある。松戸市子和清水貝塚は、250×150mの範囲に遺構が分布、阿玉台、勝坂・加曾利EⅠ・Ⅱ式の、各時期に相当する住居址278軒、土壌1,000余基が検出されたという。全体図によると、舌状台地の一端に集落が占地しており、台地平坦面のやや高みの周縁部に住居群が環状に廻り、中央部に土壌群が存在している。貯蔵穴群が環状集落の中央部に形成された典型例といえる。船橋市高根木戸遺跡で環状集落の北側一角に、松戸市子和清水貝塚では環状集落の内部の広場地域に、袋状土壌群が存在していた。茨城県桜村下広岡の場合は、台地北奥に弧状に住居址群が検出され、その南側に接して土壌群が存在していた。帯状の住居址群が弧状に展開しているように見え、土壌群はその内側ではなく外側に、つま

り、集落空間の広場ではなくその外縁にある。微地形上の制約のない広い平坦面の中央部分に存在しているわけで、その範囲は台形状（上辺約60・下辺約92m・高さ約36m）の地形に空白がないほど密集している。この集落の存続期は、阿玉台～加曾利ⅤⅢ式期でそれらは「数群に分かれて、それぞれが適当な位置を保ち、いくつかの土壇を伴って一集落を構成していたであろう」と報告されている。まさに住居と最も相関性が高い場所に特定エリアを設けて土壇を構築したことが分る。台地中央部であるから構築場所は無限といえる状況であるにも拘らず、住居近傍の局所的なエリアに土壇を掘り続けたことは、集中管理、共同体の監視下におく意図を反映した結果であるといえよう。

個々の集落における土壇地区の位置は一様でない。西田遺跡や下広岡遺跡では居住域の隣接地にあり、子和清水貝塚では居住域の中央広場にあり、上の原遺跡もそれに近い位置関係にあるようだし、高根木戸遺跡では馬蹄形集落の北側一角にあった。

このような土壇地区の在り方は、遺跡それぞれの差はあるにしても住居群と密接不可分の位置関係をもっていることで共通している。土壇の「群在性」は、日常起居の場と一体的な位置関係を保ち、その場の継続使用を強制されることに起因している。土壇地区をどこに決めるかは、集落それぞれの個性による差があるわけで、要は場所を限定する行為自体に意義がある。土壇は、居住域の近傍に設置されるが個々の住居に付随した食糧庫ではなく、集落全体の共有食糧として管理された。それが特定された地区での累加をもたらし、土壇の群在化現象を招来した。堅果類食糧の集中管理こそ群在性土壇の本質であった。

食糧の主体で常食とされた堅果類は、共同体の人口維持に不可欠の物質であり、大量に安全かつ変質しない方法で確保される必要があった。前期中葉以降増え続けてピークに達した中期中葉の人口に対応するには、各生業圏をベースとする集落が共同作業を強化して食糧確保を続ける必要があり、戸別で恣意的な食糧収集は基本的にあり得なかったと思われる。ドングリ、クリ、クルミ、トチなど種類により採集期や生育場所が異なる堅果類を大量に収集するには、連続的、長期間に及ぶ共同作業がないと困難である。堅果類の大量確保は共同体集落における至上の生業であった。集落維持の根幹に係わる常食は集中管理され確保されねばならなかったのである。袋状土壇の「群在性」は、単に食糧貯蔵のみならず共同体全体の常食備貯と集中管理とを意味している。土壇管理を最要務とする文化圏が成立する所以である。

縄文社会にあって主食は堅果類であり、その貯蔵も当然行われたであろう。その方法には地域差があるわけで、群在性土壇が示す食糧管理の在り方はその中の特徴的な一形態といえる。

袋状土壇の基数は、その集落の盛衰に対応して増減する傾向がある。土器形式による時期区分で土壇の増減を見た例として、梨木平遺跡では阿玉台式末葉＝Ⅰ期から加曾利ⅤⅡ式期＝Ⅴ期までの間で、Ⅱ期とⅤ期に著しい土壇の減少が見られ、減少後のⅢ・Ⅳ期に群在のピーク期に達す

る。上の原遺跡でも、阿玉台末葉のⅠ期から加曾利Ⅱ式のⅤ期の間と同様の傾向が見られる。両遺跡とも、子ピットを伴う加曾利Ⅰ式（古、新）期を中心にピーク期をもち、加曾利Ⅱ式に至って減少期に移行している。それが加曾利Ⅰ式古段階の浄法寺タイプ盛行期＝Ⅱ期が減少期に当たり、その後ピーク期が後続して出現するのはⅡ期自体の時間幅の短かさによるものか、分村など集落人口の減少によるものか、その他の環境条件によるものか、類例の比較により更に検討する必要があるが、集落継続の途中にこのような土壌減少の時期があることは注意すべきであろう。

(3) 盛行期と地域

貯蔵穴として土壌が群在性をもつに至るのは、定形集落における居住域、広場、墓地、貯蔵域、捨場など場の区別が行われ、土壌地区として使用規制をうけるからである。定形集落の中での土壌地区が特定されるようになるのは、北関東及び東関東（下総台地など）では各調査報告書によると阿玉台式末葉で大木8 a 式の浸潤をうける時期に当たる。福島県域でもおよそその時期に当たる。大木8 a 式期の定形集落の典型例、岩手県西田遺跡をはじめ福島県七郎内C遺跡（石川町）、茨城県下広岡遺跡（桜村）、群馬県三原田遺跡（赤城村）、千葉県子和清水貝塚（松戸市）など多くの類例を数えることができる。この時期は中期文化のピーク期に当たり遺跡数も多く、土器づくりひとつにしてもエネルギーで活気に満ちた時代であった。群在性土壌の慣習は、このような大木8 a 式の浸潤とその影響をうける地域にあって突然的に開始される。北関東において前期末から中期前葉の遺跡が激減し、その時期の集落構成が明らかでないので、大木8 a 式浸潤期の顕在化が強調されすぎるきらいもあるが、目下の調査事例からは大木圏から中葉中葉にもたらされた土器と慣習という感が強い。

袋状土壌による堅果類の共同備貯は、東北地方北部で縄文前期に出現した。袋状土壌の群在は野外施設による貯蔵方式が慣習として確立された、ということである。その初現的な遺跡として、秋田県杉沢台遺跡（能代市）と岩手県鳩岡崎遺跡（江釣子村）を上げることができる。報告書に基きその概要をみよう。

杉沢台遺跡は、段丘の台地北縁に立地し、その縁辺から北斜面に前期の住居・土壌群が検出された。土器型式は第1類から5類までありその順に変遷し、第1類＝円筒下層A式、第2類＝円筒下層B式、第3類＝円筒下層C・D式、第4類＝円筒下層D式、第5類＝円筒下層D₂・同上層A₁式、に当たるといふ。いま、第1類期から第4類期までの遺構分布の状況を見ると、

第1類期 斜面に中型住居があり、その東側に土壌が点在する。

第2類期 斜面に、前の時期よりやや西へ寄った地域に小型住居、その西側に土壌が点在する。

第3類期 大型住居が出現。斜面に、第2類期よりやや西へ寄った地域に大型住居がつけられ、その西側に土壌が点在する。

第4類期 台地縁に大型住居、その周縁に中・小型住居、また斜面にも同様の住居が点在する。

この時期の土壌は明確にされていないが、大型住居直下の斜面に西寄りに時期不明の土壌が多数分布しているので、これらの中で該当するものがあるかも知れない。

これらの在り方から、次の事柄を上げることができる。

1. 住居と土壌群とのセット関係が前期初頭に成立していた。
2. 遺跡群は、はじめ斜面に立地し、時期を追って余白部を東から西へ移動し、その終末段階の前期末葉に至って立地傾向が変化し、大型住居が台地平坦面につくられる。
3. 大型住居4棟・中型住居5棟はすべて二段床（所謂「ベット状」「ベンチ状」の床面）で、それは複数の地床炉をもち継続的な居住があったことを示す。

群在性土壌の初現の様相を示す杉沢台遺跡において、袋状土壌群の在り方は、住居の傍に構築する点で、堅果食糧の共同管理が行われたことを示唆するが、基数や密集化などは縄文中期に見られるそのように顕著な傾向は見られない。

鳩岡崎遺跡は、東側に低地を臨む比高約8mの段丘縁辺に立地し、平坦面の北側に大型住居、南側に住居と土壌群、が密集して検出された。遺構は大木6式、大木7a式、大木7b式、大木8式（a、b）、それ以降の各時期に及んでおり、その在り方は、59図の如き状況である。

大木6式期 大型住居が台地縁に直交してつけられ、その長軸沿い両縁に袋状土壌群があり、そこから30～40mの余白地を隔てた南側の平坦面にも袋状土壌群がある。北東斜面の下位部分には小型土壌の群在が見られる。

大木7a式期 前代の大型住居の南側余白地に、二段床を伴う大型住居がやはり台地縁に直交してつけられる。その南側平坦地に、住居と袋状土壌群とが密集状態で存在する。

大木7b式期 前代の土壌地区の局所的な余白地に袋状土壌群がつけられる。調査区域には住居址の検出はない。

大木8式期 大木6式期大型住居の跡地に大木8a式期の住居址があり、土壌密集地区の局所的な余白地に8a・8b式期の土壌がつけられる。

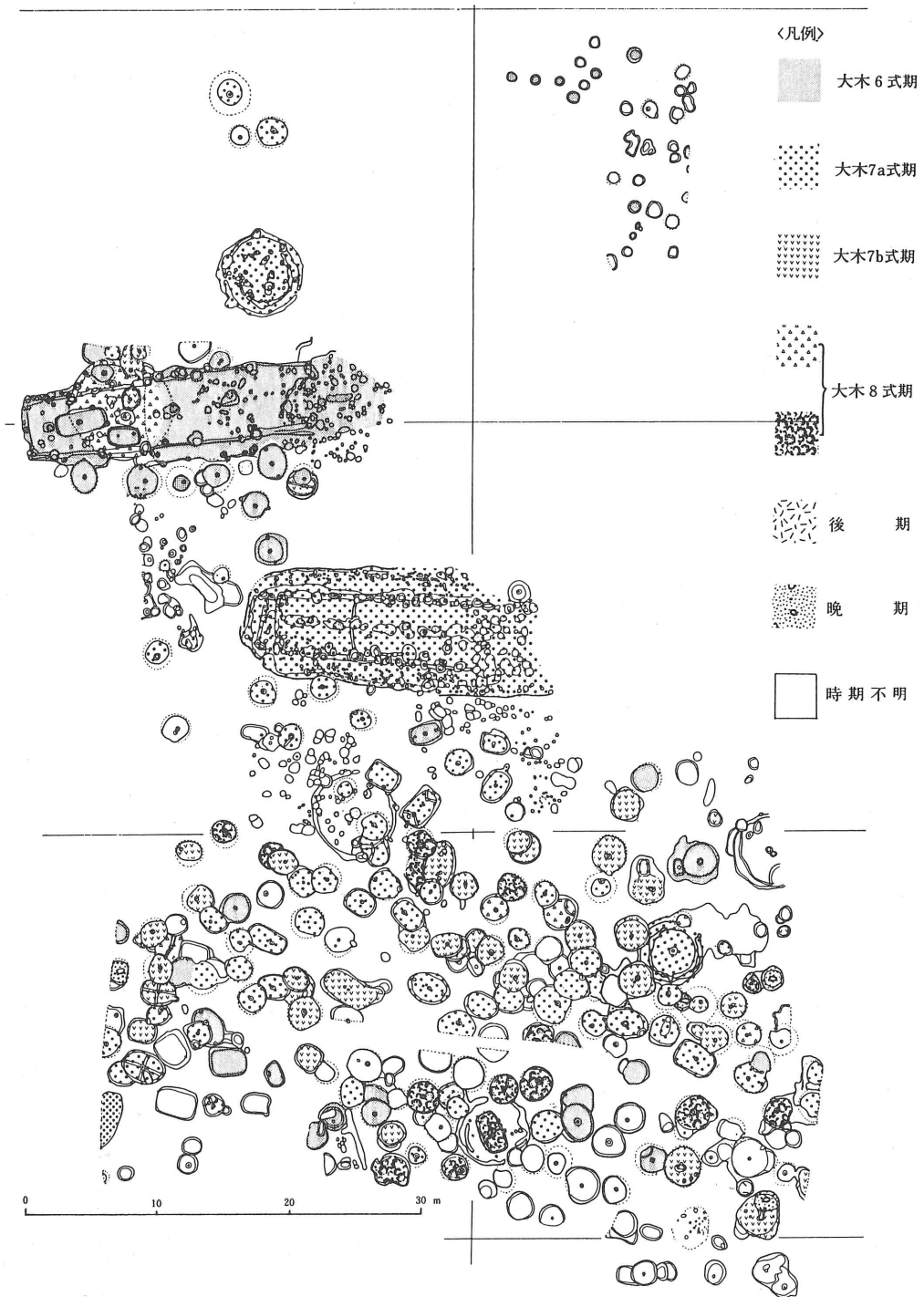
これらの在り方から、鳩岡崎遺跡では、

1. 前期末葉・中期初頭に、大型住居と袋状土壌のセット関係がみられる。
2. 遺構の立地が、台地の北側から南側へ余白地を求めて移動している。
3. 前期末葉以降、土壌密集地区の形成がはじまり中期中葉に及ぶ。分布状態は、同時期の土壌が局所的な集中を呈し累加した様相を示す。

以上のような、杉沢台と鳩岡崎の在り方から、東北地方北部にあっては、大型住居と袋状土壌群との組合せ、野外貯蔵の施設として「土壌地区」の特定、集落空間における施設の立地移動、などの現象が縄文前期に成立したことが分かる。袋状土壌による堅果類貯蔵と共同管理の方式は、縄文前期の早い段階で東北北部において成立したのであった。それはヒプシサーマルに先駆けし、温暖化が進む多様な落葉樹林相を基盤とし、その豊かな恩沢を享けて中期初頭ころまで展開したものと思われる。この後、中期中葉に至って岩手県南部・山形県域から東北地方南部・北陸の一部、更に北関東・東関東地域に及ぶ広汎な〈群在性の袋状土壌〉圏が成立する。拡散現象である。大木8a式土器の影響圏は前代に比べ著しく強盛化し、東北南部を中心にその周辺地域で大木8a式の受容や「合の子」土器がつくられていく過程と袋状土壌の群在化とは期を一にしている。この大木圏から南漸現象は、単に文化的な拡散に止まらず気候の冷涼化に伴う林相変化が東北北部から東北南部・北関東に及んできたことに要因があるのではなからうか。前期中葉の温暖気候が次第に後退し、「縄文の森」の変化への対応をせまられる中期初頭に降にあつて、膨張した人口を維持するために組織化した生業と常食の確保は必須の条件であった。群在性袋状土壌が意図する食糧管理のシステムは、このような生業基盤の変化に対応し中期社会の展開を支えたものと思われる。

関東にあって、群在性土壌は中期後葉に至っても継続し、後期前葉まで存続した集落ではその時期まで存在する例もあるようだが、総じてこの時期には衰退傾向が著しい。中期後葉の事例として、山形県郡之神遺跡（飯豊町）=31基：中期後葉～後期初、岩手県繁Ⅲ遺跡（盛岡市）=4基：中期末葉、宮城県菅生田遺跡（白石市）=11基：大木10式期、福島県上の台・日向遺跡（相馬郡真野ダム）=25基：中期末～後期前葉、茨城県赤松遺跡（竜ヶ崎市）=82基：加曾利EⅡ～Ⅲ式期、などをはじめ幾つかの報告がある。その中の上の台・日向遺跡（道を挟んでひと続きの遺跡と見られる）は、東面する段丘の高みに大木9～10式期の住居址8軒があり、東側の一段低い段丘面に土壌群が存在し（上の台A）、段丘高みに西側平坦面に大木9～10式期の住居址5軒の周辺に土壌16基が点在し（日向）ていた。土壌は円筒状で大小あり、中期末葉から後期前葉の住居と同時期に形成されたもの。土壌は住居周辺に散在している感じで、特定された地区に群集累加した中期中葉とは様相を異にする。集落の存続が短いので、土壌数も少いこともあろうが、群在性の密度が薄くなり土壌地区の形成に衰退化の兆が窺われる。

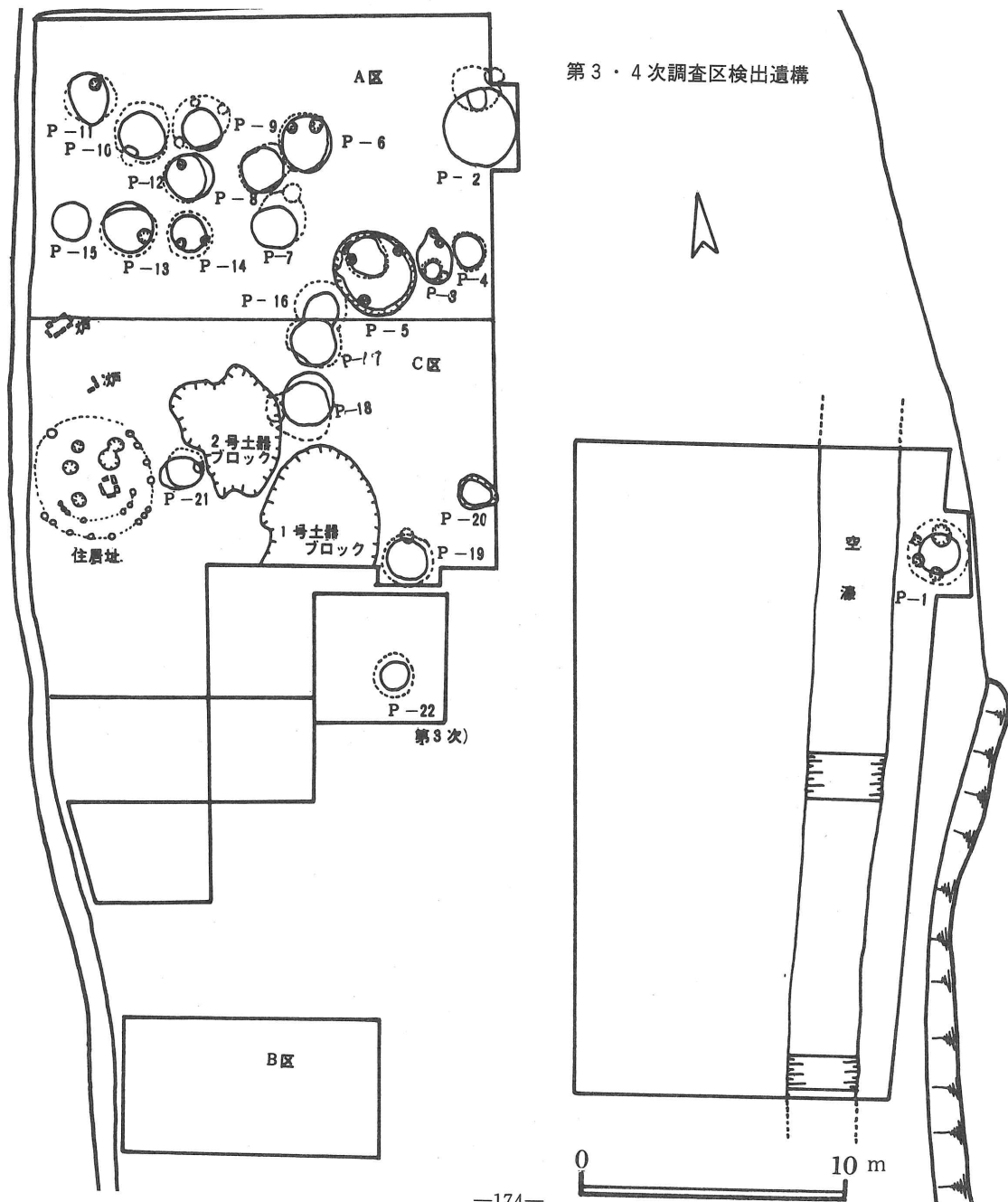
中期末葉は気候の冷涼化が進み降雨量が減少して行った時代だという。堅果類の不作が続き、生業体系に大きな変化をきたしたことが予想される。ヒプシサーマルに後続する採取繁栄の時代の終焉であり、中期社会の変質を示唆する事象がいくつか指摘されている。関東圏で見られる中期集落の断絶もそのひとつで、栃木県域でも中期後葉の集落数が激減し、存在する集落も規模縮小などの傾向が見られる。中期末葉にあたる加曾利EⅡ～Ⅳ式期の集落構成は、北関東では遺跡



59図 鳩岡崎遺跡・時期別遺構配置図

(岩手県教育委員会「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X V」による)

調査事例の少なさと関連して実態がよく把握できない恨みがあるが、比較的調査が進んでいる福島・宮城などにおける集落の在り方と相似しているのではないかと推測する。群在性の袋状土壌が多様な落葉樹林相を基盤とする生業体系に立脚していた以上、気候冷涼化がそれを狂わせ集落の存立を危うくした、と考えられるからである。中期後葉における土壌形態の変化や基数の現象などは、このような環境変化に対応して、不足する堅果類を補う食糧保存の在り方が新に現われたことを思わせるのである。



3 中期の土器

梨木平遺跡の発掘調査で出土した土器をもとに、中葉の土器の変遷を概観しよう。当遺跡の袋状土壌群のうち、土壌内から出土し、一括投棄やそれに近い在り方を示す共伴の可能性が強い土器個体を主な資料とする。これらの土器は、大別して五段階に変遷する。

縄文土器は、地域集団の強い規制下につくられ、使用される。上河内村が北関東に所在するという地域性のゆえに関東圏（加曾利E様式）と東北地方南部圏（大木様式）の狭間にあって時期により二つの文化圏の様相を反映しつつ、当地域の中葉の土器群は在地的な変遷を遂げている。それは次の五段階である。既成の編年との対照は次頁17表の通り。

I期＝阿玉台Ⅲ式（栃木県域の呼称）、II期＝加曾利EⅠ式（古）、III期＝加曾利EⅠ式（新）、IV期＝加曾利EⅠ式（新）、V期＝加曾利EⅡ式

これらを大木様式の各段階に対比すると共に、栃木県域内の特徴的な伴出例に基づいて地域的仮称を付加し、その五段階の概要を述べることにする。

I期（湯坂期）

関東在地の阿玉台式の最終段階、湯坂遺跡 T₁ - V区ピットの伴出個体群を指標とする。阿玉台Ⅲ式には、勝坂式の要素をもつ変容型の一群と縄文地文を普遍化した阿玉台式自体の退嬰化を示す一群との二群が含まれる。模式的には、前者が古、後者が新、の先後関係をもつと思われるが、伴出資料ではその分離が明確でない。この段階では、大木8a式が加わって二面的な組成となる。大木8a式はその古手の段階に当たる一群で、S字文モチーフのデコレーションをもつものや縄文地文に結節沈線で、渦巻文・屈折文などを描く〈合の子〉様のもの、それに火炎土器系のものなどを含んでいる。

60図の1・2, 3・4, 5～8, 9は、I期に該当する各土壌伴出（図の説明文参照）の土器である。

1は四対応する嵌孔突帯と縄文地文、2は半截竹管を横位に押しきした縦位の条列縄文をそれぞれ特徴とした退嬰型の阿玉台式。3は胴下部で、楕円形の棒状文を四対応させ、下位は底部に至る無文部をつくり出す。4は条線地文に嵌孔した山形把手を四対応させ隆線の背に刻み目をもつもので、3・4はともに勝坂式の要素を受けた変容型。5・6は嵌孔把手を四対応させ区画部に施文した変容型、7は縄文原体の押捺と貼紐を、8はS字文貼付のデコレーションをそれぞれ特徴とした大木8a式。9は細い貼紐と結節沈線とを特徴とする大木8a式の〈合の子〉型。これら個体のうち、まず阿玉台式の最終段階に、県央に近い当遺跡においても大木8a式が伴出することが明確に看取される。その阿玉台式は、5～8の大木8a式の古手の要素を持つ一群を伴う変容型、それとは異なる退嬰型とに二分される。変容型の4においても体部装飾文に細い貼紐を用いるなど大木8a式の影響が窺われる。

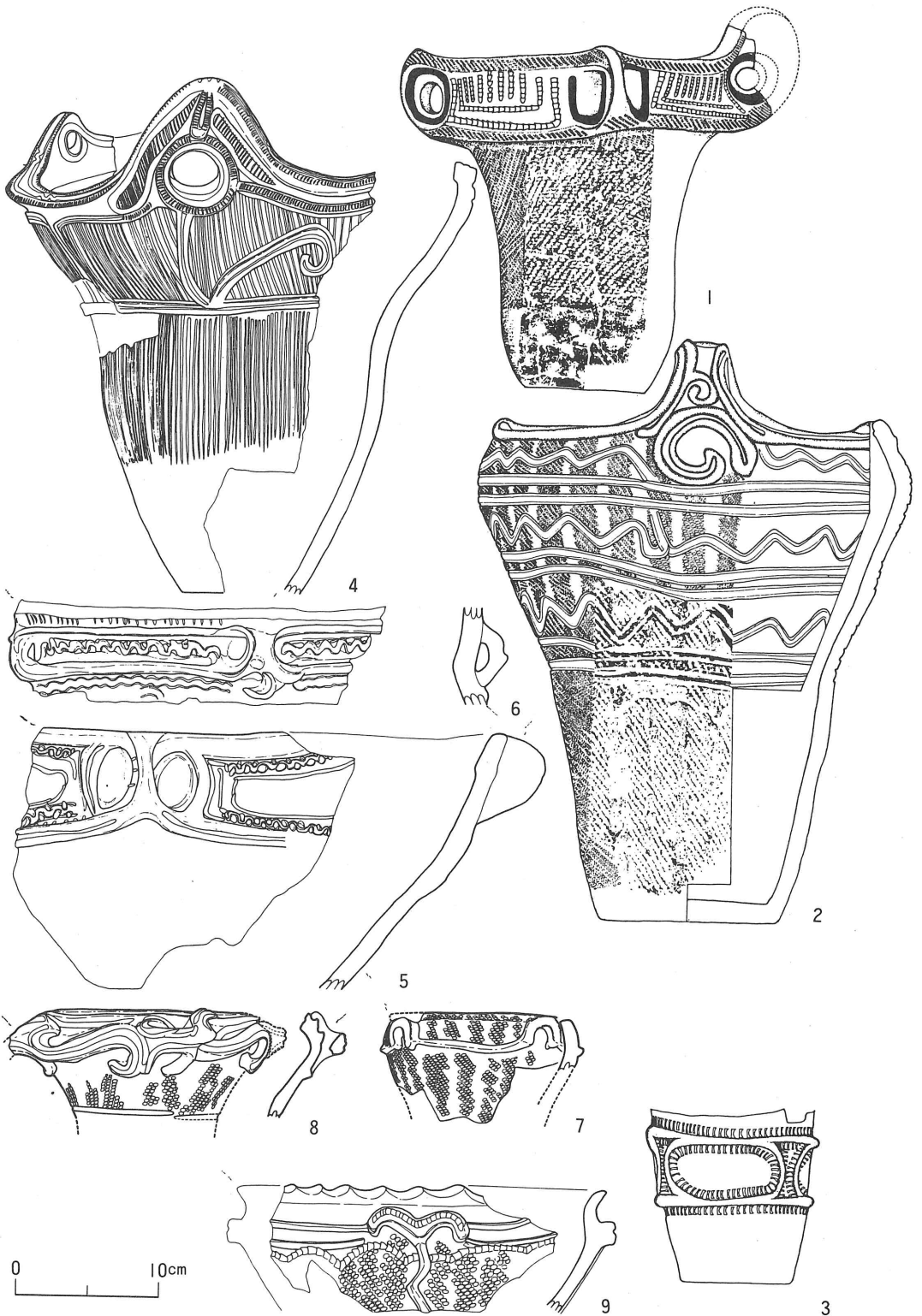
17表 梨木平遺跡：土器の編年位置

昭 56 大会	大木式	関 東	中部山岳	梨 木 平
I 期 (下小野五領台)	大木7 a 古	下小野五領台		
II 期 (阿玉台出現期)	大木7 a 新	阿玉台 I b (西村)	貉沢	
III 期 (勝坂最古段階)	大木7 b 古	阿玉台 I b (")	新道	
IV 期 (勝坂盛時段階)	大木7 b 新	阿玉台 II (")	藤内 I	
V 期 (勝坂終末段階)	大木8 a 古	阿玉台 III・IV (中原) (中峠) (")	藤内 II 井戸尻	I 期
VI 期 (加E 1 古手段階)	大木8 a 新	東京加E 1 期 (吹上)	曾利 I	II 期
VII 期 (加E 1 新手段階)	大木8 b	東京加E 2～3 期	曾利 II	III 期 IV 期
VIII 期 加曾利E II (連弧文出現期)	大木9 古	東京加E 4 期 ▽連弧文出現期	曾利 III	V 期
IX 期 (加曾利E III)	大木9 新	東京加E 5～6 期	曾利 IV 曾利 V	
X 期 (加曾利E IV)	大木10	東京加E 7 期	曾利 V	

梨木平遺跡
土器の時期区分
I 期=阿玉台 III 式
(栃木県域の呼称)
II 期=加曾利 E I 式
(古)
III 期=加曾利 E I 式
(新)
IV 期=加曾利 E I 式
(新)
V 期=加曾利 E II 式

『北関東を中心とする縄文中期土器10段階区分対照表』

昭和56年度日本考古学協会・シンポジウム「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」による



60図 I期の土器 1・2=3次・P.22 3=4次・P.21 4=2次・P.13
5~8=1次・P.37 9=1次・P.42

このような在り方から、Ⅰ期を先後に区分することは難しく、両者の伴出もその傾向を裏づけているようである。東北地方の土器である大木8a式が、関東在地の阿玉台式と伴出する事実は、大木8a式の急速な波及とそれに伴う土器型式受容のためらいを示しており、この現象が古い土器である阿玉台式を終焉させ、新たな土器である加曾利EⅠ式成立の前駆的役割を果たしていることが首背されるのである。

Ⅱ期(浄法寺期) 北関東在地の加曾利EⅠ式は強い地方色をもって成立、発展し、やがて広域化した特徴を備える。前半の局地性の強い段階を加曾利EⅠ式古、後半の広域性を備えた段階を加曾利EⅠ式新、と区分しておく。EⅠ古は大木8a式の新しい段階に、EⅠ新は大木8b式に対比されるが、細部にわたっての対比にはまだ検討の余地が多い。

本編の「Ⅱ期」は加曾利EⅠ式古に当たり、大木8a式新に対比され、「Ⅲ期」と「Ⅳ期」とは加曾利EⅠ式新に当たり大木8b式古と新とにそれぞれ対比される。

ところで、Ⅱ期を「浄法寺期」なる地域的呼称をもって当てたのは所謂「浄法寺タイプ」の消長に重点を置いたからである。浄法寺タイプの土器とは、キャリパー状深鉢の口頸部に複弧の貼紐を充填して彫刻的な渦巻文装飾を施し、体部には地文に四単位の懸垂文を配する“上主下従”の二段の文様構成を特徴としている。この土器群は、浄法寺遺跡(小川町)N-21区P.1の伴出個体を指標とする。先行する土器の要素が払拭され、北関東的な地域的個性の強い土器群として出現し、本県としての加曾利EⅠ式が本格的に成立する。浄法寺期は大木8a式新に対比され、「浄法寺タイプ」の盛行期である。しかし、「浄法寺タイプの出現」という点では、大木8a式新の段階の伴出土器群の中に当該土器が含まれており、資料として上の原遺跡(高根沢町)JD.12、浅香内遺跡(黒羽町)F6、「浄法寺タイプ」を含まないが槻沢遺跡(西那須野町)14H-P.2(通称三〇個ピット)などのそれぞれ土壌伴出の土器群が上げられる。

上の原JD.12の組成は、阿玉台式・「浄法寺タイプ」・火炎系土器を含む大木8a(新)式である。この土器群は、大木8a式新に、先行土器である阿玉台式や大木様式とは異系の火炎系譜の土器など多様な組成をもっており、浄法寺タイプは発現するもののまだ組成土器のひとつに止まり主体的位置を占めていない。この時期は、前段階の湯坂期に後続するもので、大勢としては阿玉台式の最終末と新たにもたらされた大木8a式の共存がみられるか、大木8a式は、湯坂期のS字文モチーフの一群や〈合の子タイプ〉などの古手の土器群に代わって、新たに二本組みの貼紐や半截竹管による屈折文が多用される一群や火炎式系譜の土器が登場して新手の土器群へ移行する。この大木8a新の段階を経て、浄法寺タイプを主成分とする在地性の強い浄法寺期が確立される。「浄法寺タイプ」は、火炎系の土器から派生して確立され、これに、前段階の“二本組みの紐”を継いだ横位展開のクランク文を飾り文様とする土器などが伴う。



61図 II期の土器 1=4次・P.1 2~5=4次・2号ブロック
6~9=4次・1号ブロック

右の状況から、「Ⅱ期」は、「浄法寺タイプ」の在続から見れば連続した時期であるが、段階的には、きわめて大木の色彩が濃い外来的な土器群が盛行する前半期と、北関東在地の個性的、自生的な土器群が盛行する後半期との二時期が在続するのである。文様構成から見れば、前半期の口頸部と体部とに同等に施した飾り文様や、横位展開の施文の在り方などに代わり、後半期には口頸部に文様が集約されると共に器面を四単位に縦割りして施文する方法が成立する。

この時期には、関東各地にあってそれぞれに個性的な土器群が成立しているが、Ⅱ期に見られる浄法寺期の消長もそのような揺籃期における加曾利EⅠ式の局地的な様相を示すものとして捉えられるのである。

61図の1, 2~5, 6~9は、Ⅱ期の後半期すなわち浄法寺タイプ盛行期に該当する各土壙伴出(図の説明文参照)の土器である。

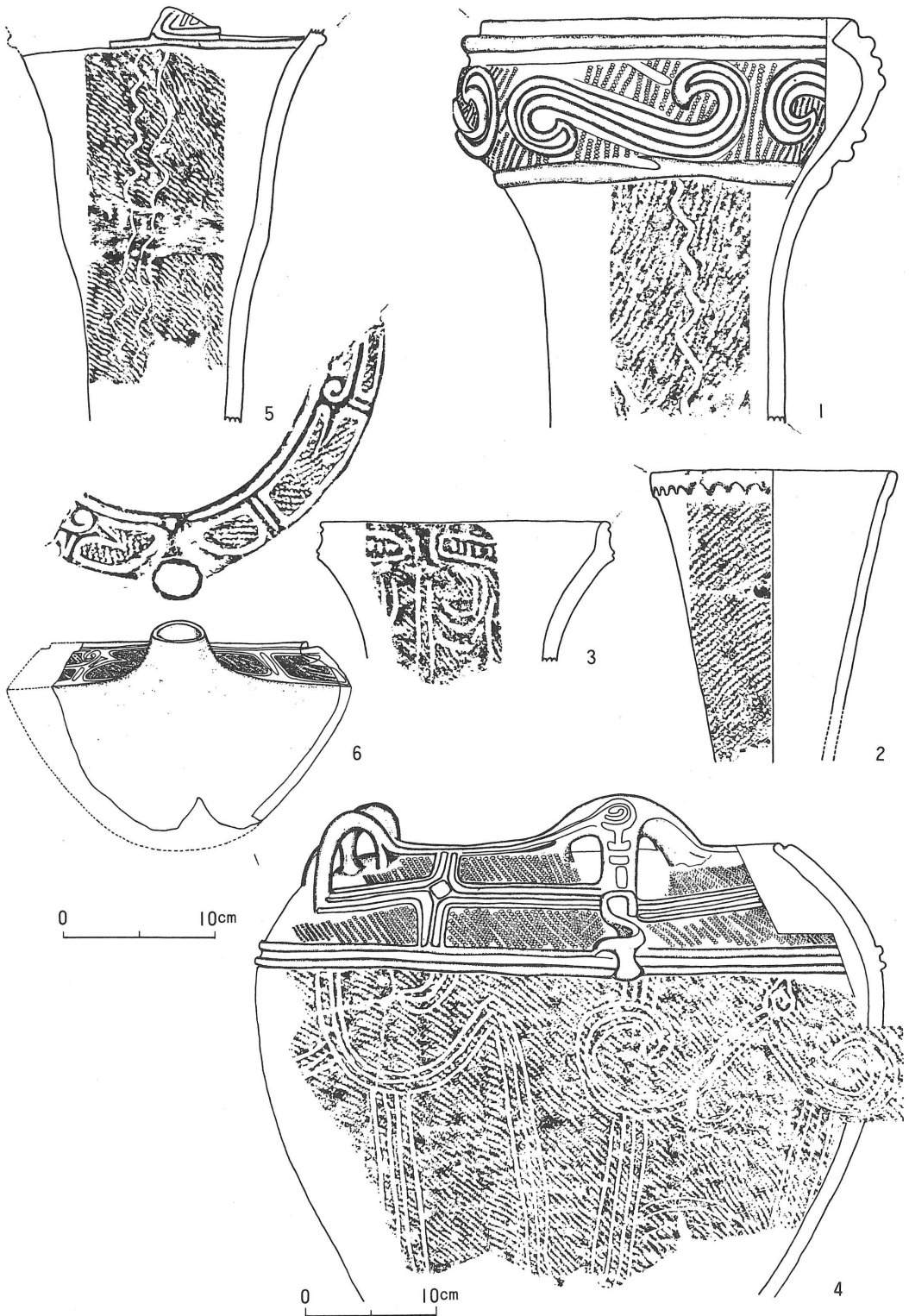
1~3は口頸部に半肉彫り的に複弧文を集約した浄法寺タイプの典型例。6も同類の土器だが体部文様に火炎土器の名残りをとどめている。4・5は、これに伴うもうひとつのタイプの土器で、二本組みの貼紐で口頸部にクランク文を施す。大木8a式新の段階に盛行する意匠文であり、その流れを汲む土器といえよう。7~9は、その二者に伴出した土器で、目立った特徴をもたないが、8つの円錐状の貼瘤は僅少な装飾文である。

この円錐状の貼瘤は、2次・P. 6の個体にも見られる。「上河内村史」ではⅠ期に当土器を位置づけたが誤りであった。尚、2次P. 13で阿玉台式と伴出した、とする記述も誤記であった。謹しんで訂正する。)この土器タイプはもう少し時期を下げて大木8b式盛行期におくべきかと思われるので、更に検討してみたい。

浄法寺タイプの盛行期には、このような特徴的な二つのタイプの他に立体的な箱状把手をもつ大形土器が出現する。梨木平遺跡では伴出例がないが、この類の土器は次の大木8b併行期まで在続する可能性があり、より後出的な土器と考えられる。提示したⅡ期の資料は、前述のとおりその後半期に位置づけられるもので、県北地域における加曾利EⅠ式が確立した段階の様相をよく示している。

Ⅲ期(梨木平期) 浄法寺期に連続し、時間的にも近い段階。Ⅱ期の二タイプのうち二本組みの貼紐によるクランク文、S字文等が多用されるが、殊に渦巻文や縦位の短線で口頸部に四単位の区画をつくり出し、“上主下従”の文様構成がいっそう顕在化する。区画部の余白を縦位の刻線を併列して充填するのも特徴。新しいモチーフとして、三脚の山状把手、渦文や曲線文に組み合わせた剣先文、渦巻文を波状口縁の頂部につけて肥厚させるなど。体部装飾文は、懸垂文により四単位縦割り構成を基本としシンプルさが継がれるが、剣先文、カギ手文などの新しいモチーフが二、三本組みのヘラ描き沈線による懸垂文にとり入れられる。半截竹管の押し引きによる平行沈線は消失する。

Ⅲ期は、浄法寺タイプの土器を伴わないが、それに伴う大木系土器を主体的に継ぎ、滑らかな器形曲



62図 III期の土器(1) 1~6=4次・P.18 (共伴)

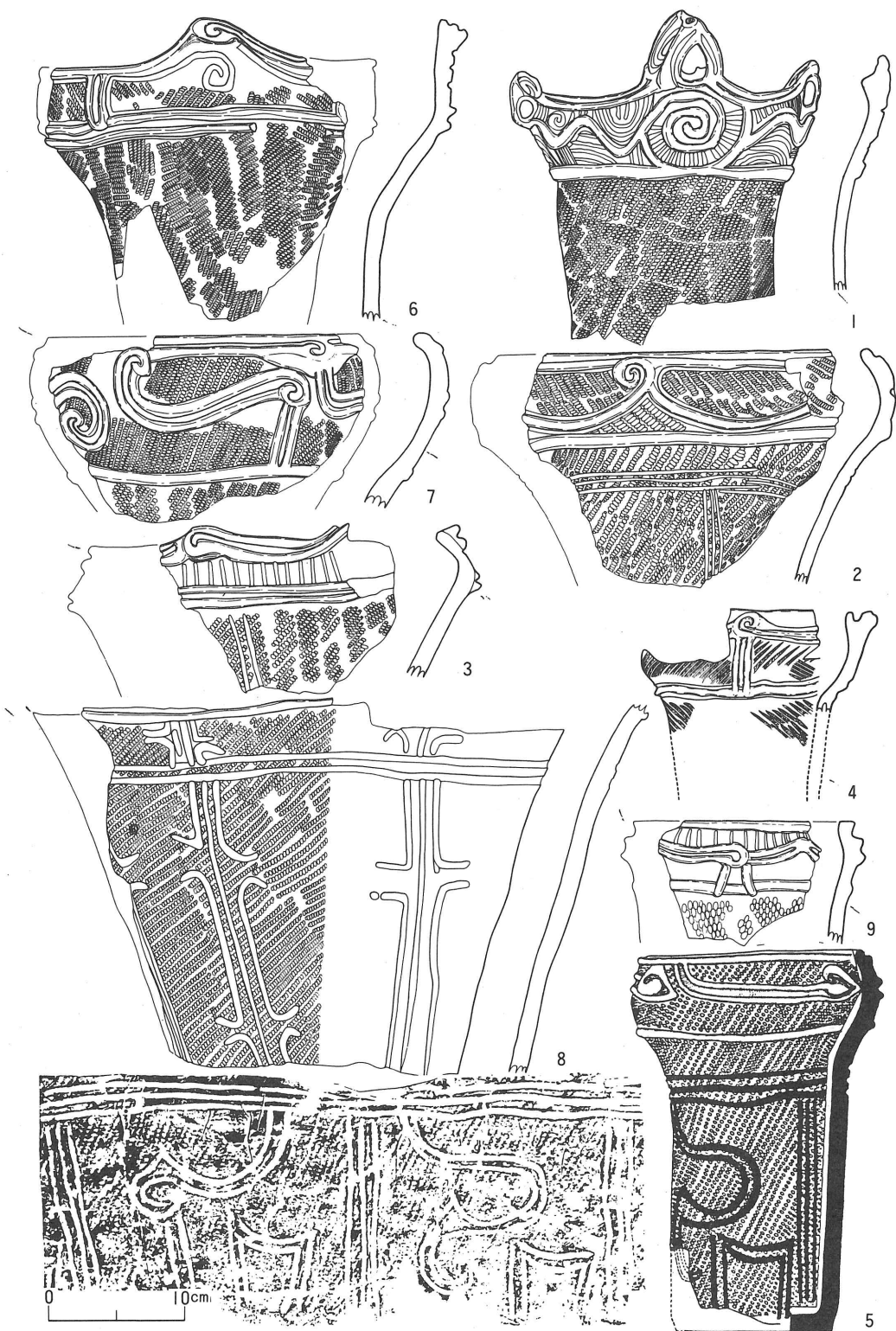
線をもつキャリパー状深鉢が確立する。新しく用いられるモチーフは大木8b式に由来するもので、これら一群を大木8b式の古手の段階に対比させ、加曾利EⅠ式新の前半に位置づけたい。梨木平遺跡4次調査P. 18の伴出資料を指標とし、従前大木8a式対比の扱いの中から、この一群を分離し、一ランク下げて大木8b式対比とすると共に、本遺跡で発掘資料で伴出関係が幾例か把握できることに鑑み、この段階を「梨木平期」と仮称しておきたい。

62図は、梨木平4次P. 18の伴出個体で、これらは踏みこわした大型土壙中に一括投棄されたもの＝別項〈第3・4次調査の概要130頁〉。1は、四単位のS字文を配し体部に蛇行する懸垂文をもつ。口唇は二重につくり出され、キャリパー状器形の在り方と共に加曾利EⅠ式の熟成した特徴を持つ。2・3・5は、上半がほぼ直線的に外反する深鉢で、中型の土器。4は、大木的要素を強くもつ甕形土器で大型。四対応する三脚把手や体部の屈折文、剣先文のモチーフなどに、大木8b式との関連が窺える。口頸部の十字文は、線が交差しない（切り合わない）のは、大木式の他の意匠文の場合も同様。この隆線は貼紐だが、沈線で表現する例も多い。6は“片口型”の注口土器。破損品の一部だが、頸部文様帯は剣先文を中核として三単位の割り、そのうちの一区画に注口部がとりついている。器面に朱彩があり、酒器等の特殊機能が考えられるが、この時期の注口土器は器種としても僅少である。

63図の1～3, 4・5, 6・7, 8・9は、Ⅲ期に該当する各土壙伴出（図の説明文参照）の土器である。

1は、三脚把手ひとつと嵌孔の小把手三つを対置させ、口頸部の横帯区画の中央に波線の貼紐（上下の区画線に接しない）を施し、余白を複弧沈線で充填している。把手や波線貼紐は大木8b式の要素だが、余白の充填施文は浄法寺タイプの流れを汲むもの。この土器は浄法寺タイプの終末段階と見られる。2・4・6・7は、渦巻文を伴う横帯区画文を口頸部に集約するもので、地文の条列を変えるなど主文様を強調している。3・9は、口頸部の余白に縦列沈線を充填。5は、口頸部に貼紐、体部に沈線で剣先文を施す。9は、大型深鉢の体部で、懸垂文に十字文を加味している。この十字文は横の連鎖がないが、前出の62図の4と同類のモチーフであろう。

Ⅲ期の土器群は、浄法寺タイプのエネルギーな施文や地域的な独創性はなく、若干のバリエーションは見られるものの流麗さが目立つだけで迫力を欠いている。既述のように、この段階では新たに大木8b式の要素がとり入れられており、これらの土器は大木8b式そのものではないが、それと深い関連をもつ点で、Ⅲ期にあっても相変わらず大木圏と不離不即の関係にあることが看取される。梨木平遺跡の当該資料には、大木8b式のメルクマルとなる大型深鉢と壺型土器が見られない。たまたま欠落していたのか、次の段階で新たに供給されるのか、目下の資料では判断しかねる。上の原遺跡J D. 63では加曾利EⅡ式の前段階の土器に、その壺形土器が連弧文土器と伴出している例があり、この二つのタイプの土器は大木8b式としては後出的な可能性も考えられる。その点では、「Ⅲ期」段階ではまだ組成化されていないのかも知れない。「Ⅲ期」を仮称梨木平期として分離したことに



63図 III期の土器(2) 1~3=2次・P.3 4・5=1次・P.2 6・7=2次・P.17 8・9=2次・P.23

より、県域内の大木8b式対比の段階は少なくとも二段階を経ることになる。二本組みの貼紐による主文様の構成は、それ自体前段階の要素を継いでおり、浄法寺タイプの名残りとどめる土器のありかたとも併せて、これらの一群を括って浄法寺期の後統期として設定したわけである。

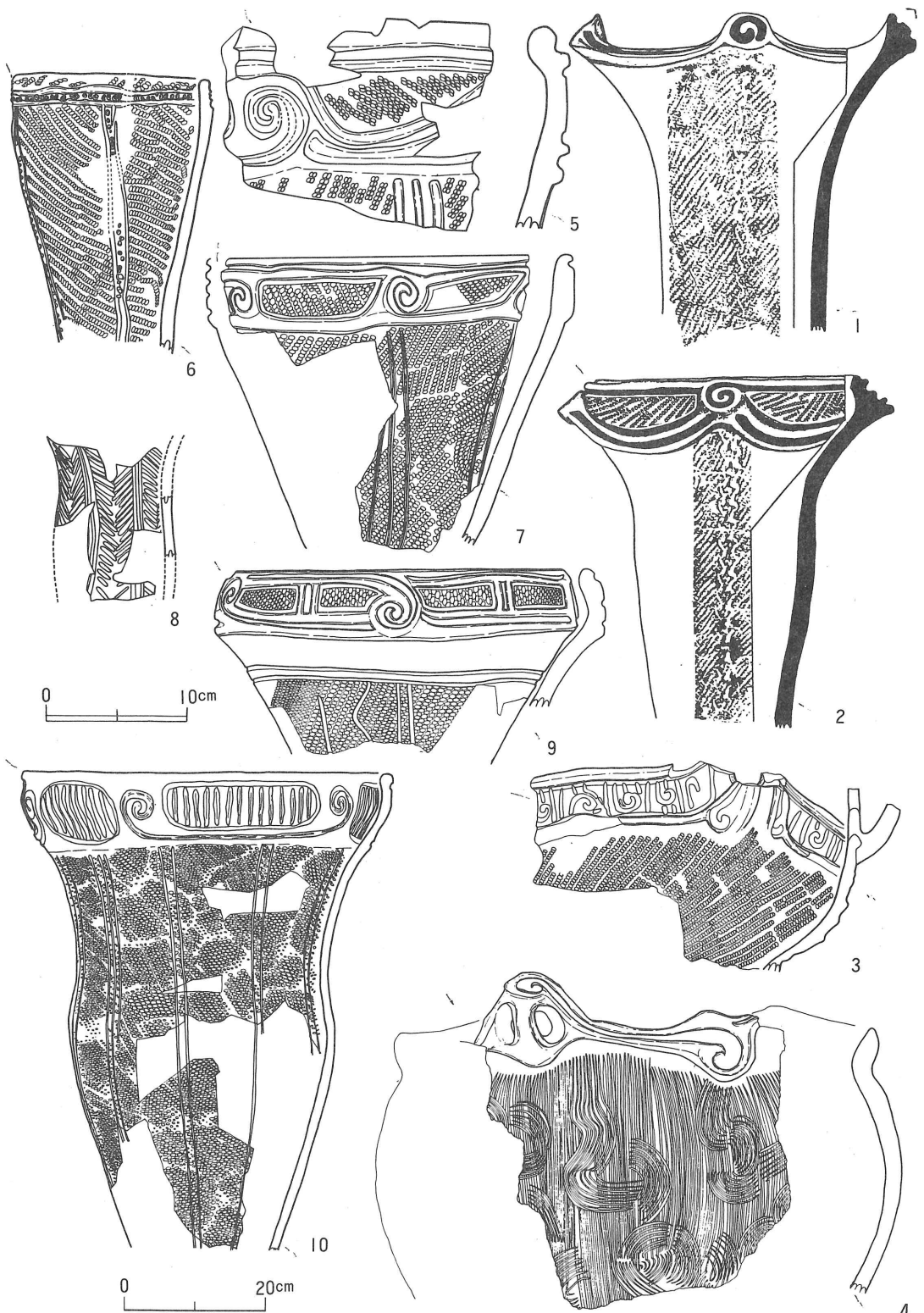
Ⅳ期(ハットヤ期)

加曽利EⅠ式新の段階で、従前の大木8b式に対比される。ハットヤ遺跡土壌(らしい)伴出の個体資料を指標とする。口頸部の渦巻文を伴う横帯区画文が確立。体部文様は、ほとんどシンプルな懸垂文に限られる。壺形土器と大型の甕形土器との二タイプが大木8b式として組成に加わる。この二タイプの在続を尺度として「Ⅳ期」とする。Ⅳ期の土器群のうち、上の原遺跡J D. 63では、大木8b式の壺形土器の伴出個体で磨消縄文による懸垂文が施されている。それはすでに加曽利EⅡ式の特徴を備えたものであり、従前の編年観では大木8b式に対比されるものであるが、大木8b式の特徴的な壺形土器の伴出をもってこの時期、あるいはこれに連続し極めて時間的に近い時期に位置づけられる。栃木県域における連弧文土器の出現は実に当該期に当たる。このように、「Ⅳ期」には、大木8b式を伴い、加曽利EⅠ式新と認められる段階(ハットヤ期)と、磨消縄文の発生がみられ、新たに連弧文が登場する、いわば“続ハットヤ期”とでも称すべき後統の段階とがある。

この後者を加曽利EⅡ式として切離さないのは、前述の上の原J D. 63の在り方で、ハットヤ期にみられる大木8b式の二タイプが依然として存続しているからである。異系外来の連弧文土器を伴いながら、大木圏との関連性が強いことは、北関東という文化圏の狭間にある地理的環境と相まって大木式自体の強盛な影響力にも大きな原因であろう。

64図の、1～3, 4, 5・6, 7, 8, 9は、Ⅳ器に該当する各土壌伴出(図の説明文参照)の土器である。1・2は渦巻文を突出させた大木8b式の最も特徴的なモチーフをもち、体部の綾絡文は大木8a式以来の地文施文に見られるひとつの装飾文。3はその伴出で、口縁部区画帯にワラビ手文を組み合わせた沈線を併列充填しており、前段階に続く一タイプ。4は三脚把手をもつ大型の甕形土器で、大木8b式の二タイプのうちのひとつ。条線地文も稀ではない。5・7・8は、渦巻文を伴う横帯区画文と体部の懸垂文との二段構成が特徴。加曽利EⅡ式の前駆的存在といえる。磨消縄文の萌芽はこの一群において見られる。6は口縁部、体部に平行沈線を引き刺突文で充填したもの。刺突文で余白部を充填したり、文様の連鎖部に刺突文を施したりするのもこの段階では多々見られる装飾文である。8は、大木8b式と共に土壌から出土している個体資料。小型の黒色精製品で、綾杉の沈線による装飾文が特徴的。西関東系譜の土器で、県域では唯一の発掘資料。加曽利EⅡ式に対比されるものと見られていたが、土壌伴出資料により「Ⅳ期」に位置づけた。

梨木平遺跡におけるこの時期の土壌数は、かなり減少の傾向を見せ、個体資料も多くない。発掘資料を実見した限りでは、連弧文土器は出土していない。ここに掲げた資料は、前述の、「Ⅳ期」を二分し



64図 IV期の土器 1~3=2次・P.42 4=2次・P.5・6次=1次・P.47 P.33 7=2次・P.43
8=2次・P.12 9=2次・炉体

たうちの前半期に当たるものであるが、5の懸垂文には磨消手法が見られるので、より後出的な、いわば後半期の土器に近いものかもしれない。

これらの土器群は、前段階「Ⅲ期」＝梨木平期に後続するが、Ⅲ期が大木8b式の最古の段階として設置されるのに対し、当該期は従前から大木8b式ないしはその対比期の土器とされてきた1・2などの土器をメルクマールとするものであり、5・6の如き“汎化”した加曾利EⅠ式を主流としている。この後者の土器が、加曾利EⅡ式初頭に位置づけられる連弧文土器出現期の土器——横帯文と磨消帯とに特徴づけられる——の成立に、県北地域ではどう関与していったのか、更に資料を得て検討されていかねばならない。この点では、梨木平遺跡「Ⅳ期」の資料は、量的にも質的にも未だしの感が深い。

V 期 加曾利EⅡ式の確立期で、大木9式古に対比される。キャリパー器形の退化に伴う滑らかな曲線が完成し、口縁部の横帯文はシンプルな円文・楕円形となり、頸部に素文帯をおいて上下の文様を分離する。体部には懸垂文が発達し、磨消縄文が一般化する。既に連弧文土器を伴わない。関東タイプの加曾利EⅡ式と、県北地域での大木9式とは区別されるべきであるが、目下のところ当該期の資料が県域では最も乏しく、伴出関係やバリエーションについても不明の点が多い。「Ⅴ期」設定の示準となるものは、口縁部の横帯文と体部の磨消懸垂帯とを二段に対置した土器で、前段階まで口頸部文様の主体をなしていた渦巻文が退化して単なる円形区画文に変わった点がメルクマールとなる。

64図の10が当該期の土壌伴出資料である。10は、楕円区画分を縦列の沈線で充填し、体部の懸垂帯には磨消がない。破片資料を除いて個体は、この資料だけである。

加曾利EⅡ式は、前述の状況であるため組成内容の把握が不十分であるが、異系譜の曾利系の大型深鉢土器が伴出するものと推定される。64図の8も当該期に出現すると予測していたが、土壌の伴出土器からみると、加曾利EⅠ式新の段階に繰り上げされる。しかしながら、資料僅少であり、これらの南関東を經由して異系の土器については、その時期的な位置づけをまだ疑問としておくべきところであろう。

(「上河内村史・上巻」111～128頁を、一部訂正の上で転載)

参 考 文 献

1. 永瀬福男他「杉沢台遺跡」(秋田県文化財調査報告書第83集) 昭56. 3 秋田県教育委員会
2. 高橋文夫他「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X V - 1・2 (鳩岡崎遺跡)」
昭57. 3 岩手県教育委員会
3. 丹羽茂他「勝負沢遺跡」(宮城県文化財調査報告書第83集) 昭57. 3 宮城県教育委員会
4. 松本茂他「七郎内C遺跡」(母畑地区遺跡発掘調査報告X: 福島県文化財調査報告書第110集)
昭57. 3 福島県教育委員会
5. 鈴鹿良一他「真野ダム関連遺跡発掘調査報告V (上ノ台A遺跡第1次)」 昭59. 1 福島県教育委員会
6. 海老原郁雄他「槻沢遺跡」 昭55. 3 栃木県教育委員会
7. 青木健二他「栃木県高根沢町上の原遺跡」 昭56. 10 日本窯業史研究所
8. 鈴木裕芳「諏訪遺跡発掘調査報告書」 昭55. 3 日立市教育委員会
9. 海老沢稔他「石岡市東大橋原遺跡・第1～3次」 昭53. 3～55. 3 石岡市教育委員会
10. 高根信和他「常盤自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ (下広岡遺跡)」(茨城県教育財団文化財調査報告X) 昭56. 3 (財) 茨城県教育財団
11. 関根孝夫他「子和清水貝塚」(松戸市文化財調査報告第7・8集) 昭51. 3～53. 3 松戸市教育委員会
12. 八幡一郎他「高根木戸」 昭46. 3 船橋市教育委員会
13. 永瀬福男「貯蔵穴」季刊考古学創刊号 昭57. 11 雄山閣
14. 鈴木保彦「集落の構成」季刊考古学第7号 昭59. 5 雄山閣
15. 宮本長二郎「関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷」(奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集・文化財論叢) 昭57. 12 同朋舎
16. 中野修秀「有段式竪穴遺構に関する覚書」日本考古学研究所集報Ⅲ 昭56. 3 日本考古学研究所

あ と が き

上河内村教委の“事務屋”にあって、梨木平遺跡発掘時の文化財担当主事は小林力、それ以降の山向遺跡発掘時のそれは小林茂で、通称が力はツウちゃん、茂はシゲさん。小さな村の小人数の役場（昭和61年度で105人）のことだから社会教育の種々雑多な仕事も当然こなさねばならない。村の文化財行政では、ツウちゃんは草創期、シゲさんは確立期の“発掘事務”を古橋喜太郎係長（後に課長）の下で担当した。村教委が、梨木平4次調査とその後の山向調査の発掘担当者として私を雇ったために、私はこの二人の小林と親交を深めることになった。親交は、〈県北は東北の始まり〉といわれる彼等の素朴な人柄や、私も含めて三人が〈飲むこと〉を共通の趣味としていたことにもよるが、文化財は大事にしなくちゃいけないという思いで強い連帯感をもっていたことに由来する。有体には“文化財好き”だったのである。その後、私が県教委文化課に移ってから、一層その連帯感は深まり、〈同志〉として今日に至っている。

この三人が寄り集ると、「梨木平はあのままでは勿体ない」という話になった。1次・2次の資料は概報だけの報告書に止まり、土器の接合や土壌など実測図面も整理がついていなかった。最初の発掘から約10年ほどの歳月が流れ、掘った時の印象も風化しかけている。何とかしよう、と思っている間に県立資料館（今の県文化振興事業団の建物）の図面置場から第1次調査の図面が見つかった。しかし第2次調査の図面は遂に出てこなかった。概報作成で、遺物整理や図面トレースをしたのは宇大考古学研究会のメンバーだったので当時のリーダーなどにも当たってみたが分らなかった。後に、ボロボロになった第2次調査の全体図が宇大の資料室から出てきただけであった。掘った遺物は村へ戻されたが、記録の保管は最終処理が行われていなかったのである。この間、昭和54年度に上河内村史編さん事業が発足した。原始古代を担当することになって、私は木村等と共に新資料探しと既存資料の見直しをはじめた。村の「原始古代」にあって梨木平遺跡は語るべきものを潤沢にもっている遺跡であった。この機会に資料を洗い直して総括的な報告書を公刊しないと「勿体ない」ままで終わってしまう。昭和57年8月、遺物の見直しを開始、初日の8月31日は、村中央公民館の機械室で隅に積んである遺物のセレクト作業中に冷房機械の作動で「騒音と暑さに参った」と当日の日記に書きつけてある。

村史担当のシゲさんがいろいろ段取りをつけてくれて、整理作業が進んだ。水洗い、接合、実測……。土器の実測には、県事業団の仕事仲間の芹沢清八とその後輩の塚本師也・鈴木実、私の宇大後輩の長谷川操やその仲間たちの、図面は宇大後輩の篠崎勝彦の、それぞれ協力を得た。遺構の写真整理は、年の瀬的那須で、泊り込み発掘の宿で進めた。版組み、原稿はそれから更に2年かかった。片手間にやるつもりもなかったが、気にかけて進めたわりには月日を要したもの

である。

「梨木平遺跡・総集編」は、村史資料の一環として発刊する計画であったが結局、予算がつかないことになり中断した。昭和61年3月、「上河内村史」上下2巻は刊行され、新年度の異動でシゲさんは経済課に移った。「梨木平の件は後任に申送ってあるから」、とシゲさんはいったが、〈半分ぐらいはダメかも知れないナ〉と思っていた。その新任は、社会教育課の渡辺千賀子補佐。原稿がすでにできていることが分ると、行動派の渡辺さんは

「それでは、9月補正で要求してみましょう！」

昭和61年9月、本書予算は村議会で承認され「総集編」はとうとう陽の目をみることになった。数多くの人々の手を煩わして――。

本書の公刊は、いつかは誰かがやらなければならなかった仕事である。梨木平遺跡が〈掘られてしまった〉その見返りとして、調査で得られた事実の記録公表。梨木平遺跡に口があれば「当然の返礼をうけた」、というかも知れない。尤も、梨木平にそういつて貰えるほどの内容かどうか自信はないのだが、第1・2次調査分について現状で可能な限りの事実記載はしたつもりである。

「いつかは梨木平遺跡資料館をつくりたい」、と三人は声を弾ませる。描く像は三様に異なるが、それでまた盃の速度も上る。だから、まだ当分は梨木平を離れるわけにはいかないのである。

(海老原郁雄)

梨木平遺跡

—第1次～第4次発掘調査の総括
(上河内村文化財調査報告 第6集)

発行日 昭和61年9月30日

発行 上河内村教育委員会

栃木県河内郡上河内村中里182-1

TEL 0286(74)2233

印刷 株式会社 松井ピ・テ・オ印刷

宇都宮市平出町4287-7

0286(62)2511 (代)

宇都宮市教育委員会